
最強の魔王を目指す！レベル的に？精神的に？レベル的にです！

村人M

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の魔王を目指す！レベル的に？精神的に？レベル的にです！

【Nコード】

N3505X

【作者名】

村人M

【あらすじ】

勇者が成長して魔王城に来るまで暇だったんで…最強の魔王目指してみました

レベル1―魔王様の旅立ち（前書き）

インフレ大好きです！あと緩い世界観なんで深く考えないでね。

レベル1―魔王様の旅立ち

―魔王城―

魔王1 「勇者が成長してこの魔王城に到達するまでレベル上げしようっと」

部下1 「え？それ以上レベル上げてどうするんですか」

魔王1 「だって暇だし…どうせなら勇者に対して圧倒的でいたいじゃない？まだレベル80ぐらいだし★」

部下1 「うむむ…でもどこでレベル上げるんですか？」

魔王1 「何か本で読んだんだけど、この魔王城の地下に隠しダンジョンがあるらしいんだ」

部下1 「…（あそこはまずいな、先代魔王様から絶対秘密にしとけって言われてるし）」

魔王1 「うん？どうしたの？てか、場所知ってるんじゃないの」

部下1 「いやいや…まさか…」

魔王1 「まっいっか★暇だし早速地下探索しようっと」

―最初の城下町近辺―

勇者1 「スライム強えええ、あ！レベル2に上がった！」

―魔王城地下―

魔王1 「地下の魔物は弱っちいのばっかでつまんない」

部下1 「まあしかし既に数百体倒しましたな（上級魔物ばかり、恐ろしい）」

魔王1 「あ！あった！これじゃない？扉って」

部下1 「…（やべえ見つかった）」

魔王1 「早速入ろうっと」

門番1「我はこの次元扉を守る者、ここを通すわけにはいかない！」
部下1「こ…こいつは！魔王1様並みの力を持っていますぞ！（先代魔王様が召喚した、異世界の魔王って言ってたな…）」

魔王1の攻撃↓門番1へ520のダメージを与えた

門番1「ふはは…その程度で倒れるものか！（え、無言で攻撃してくる何これ怖い）」

魔王1の攻撃↓門番1へ500のダメージを与えた

門番1「え…ちょ…話を…」

魔王1の会心の攻撃↓門番1へ770のダメージを与え倒した
門番1「」

魔王1「ふう、倒したわね！やったあレベル5も上がった★」

部下1「流石です！（いやあ戦闘となるとやっぱりすごいな魔王1様は）」

魔王1「じゃあ早速入ろうかな★」

次元扉「しばし待たれよ」

魔王1「扉がしゃべった…しかも良い声だし」

部下1「先代！」

魔王1「うん？先代って？」

部下1「いや…先代魔王様に声が似てたもので（そんなわけないか…魔王1様は先代魔王のこと知らないからな）」

次元扉「……」

魔王1「で？扉開けてよ、扉の先には強い奴がいっぱいいるんですよ？」

次元扉「ふむ…居ることには居るが…覚悟はできてるのか？」

魔王1「当たり前じゃない！強くなる為に来たんだから！」

次元扉「仕方ない…ならば開門しよう…」

「最初の城下町近辺」
勇者1「ふう：やっとレベル5か：そろそろ最初の城下町から遠出するかな」

「魔王1が居た世界とは別の世界1」

魔王1「この世界の魔物はなかなか強いわね：」

部下1「ですな：（それでも圧倒的過ぎる魔王1様ヤバイ）」

魔王1「まあ、レベルも200になったことだし、次の世界にでも行くかな★」

部下1「やはり我々の世界の理の外ということで、無限に強くなっ
ていきますな：」

巨大な魔物1が現れた！

巨大な魔物1の攻撃↓魔王1へ1のダメージ

魔王1「あら今更こんな雑魚が：メテオストーム！」

魔王1の攻撃↓巨大な魔物へ3500のダメージを与えた

巨大な魔物1が倒れたと同時に周囲に一つ数キロはあるクレーター
ができた

部下1「これが雑魚って：（全長数百メートルはあるぞ、しかも最
初の攻撃で後ろの山吹き飛んだし）」

魔王1「うん？何か言った？」

部下1「いや何でもございません：（用心して魔法障壁10枚展開
してて良かった！巻き添え喰らって消し飛ぶとこだった）」

魔王1「次元扉聞いてる？次の世界に転移させて★」

次元扉「分かった：少し待たれよ（凄まじい成長率、こやつなら大
魔王に勝てるかもしれん：だがまだまだだ：）」

―最初の城下町―

勇者1「銅の剣高いな…もうちょっとG貯めるか」

―魔王1が居た世界とは別の世界2―

魔王1「この世界の至る所から凄まじい力の波動を感じるわね」

部下1「はい…（やっべええ力の波動だけで気絶しそう）」

魔王1「お！早速見つけたぞ★喰らえホーリフレア！」

魔王1の攻撃3000のダメージを与えた

竜型の魔物1は咆哮した

魔王1「ほほう…この攻撃で倒れないとは…ならば！万物を切り裂けギガスレイブ！」

魔王1の攻撃4900のダメージを与えた

竜型の魔物1「この程度かね？異世界の者よ」

魔王1「え？しゃべった…しかもこの攻撃で倒れないなんて…なんですよ」

竜型の魔物1「ふむ…わしのレベルは8000…しかもこの世界を総べる者の一人じゃ」

魔王1「え！？8000！しかもこの世界を総べるって！」

部下1「すみませんでしたすみませんでした（無理無理レベル8000とか、魔王1様といえど無理）」

竜型の魔物1「まあ今回は若気の至りってことで許してやろうでないか、はっはっはっは」

魔王1「何か笑ってるし…」

部下1「次元扉さん転移お願いします！（気が変わらない内に早く逃げないと）」

次元扉「zzz」

部下1「おいしいおいしいいいいい！」

魔王1「まあ、そう慌てるな」

竜型の魔物1「ところで何故この世界に来たんじゃ？」

魔王1「そりゃあ最強の魔王になる為よ！（最初は暇つぶしだったけど…）」

竜型の魔物1「はっはっは、こりゃ威勢の良い若者じゃ！気に入った！わしの秘術で成長を促してやろう」

魔王1「つまり得られる経験値が倍になるってこと？」

竜型の魔物1「ふむその通りじゃ、得られる経験値は10倍程度にはなるかの」

魔王1「10倍！早くその秘術お願い」

部下1「え…ここは…自らの力でいきます！とかじゃ…チートじゃん」

魔王1「雑魚は黙ってて」

部下1「」

竜型の魔物1「心の準備はいいかの？」

魔王1「OK」

竜型の魔物1「承知した…はあああ魔王1に竜皇の加護あれ！」

魔王1「うわっ眩しっ」

部下1「目が目がああああ」

破壊神1の宮殿ー

破壊神1「これはこれは面白い子を見つけたわ…のう下僕1よ」

下僕1「はい！（くそおお…かつては幾千の世界を滅ぼしてきた大魔王である我が…こんな！）」

破壊神1「これは定期的に観察しないとね、下僕1もなんか面白い事があったらすぐ報告するのよ」

下僕1「ははっ」

破壊神1「さて、わらわは最近調子に乗っている神々と戯れてくる。後を任せたぞ」

下僕1「行ってらっしゃいませ！宮殿の掃除は完璧にしておきます！（一部屋が宇宙ほどの大きさがある宮殿の掃除は疲れる…がしか

しこんな掃除係で終わる我ではないぞ！」

ー次の町ー

勇者1「やっと次の町へこれたぜ！」

続く

レベルー1（1話）で登場したキャラのレベル	
魔王1	↓200
部下1	↓120
勇者1	↓7
竜型の魔物1（竜皇）	↓8000
破壊神1	↓14000万
下僕1（元大魔王）	↓140000

レベル2―魔王様少し成長？

―次の町―

勇者1「次の町に来たのはいいが…付近の魔物強くて中々レベル上げれんな…」

町民A「あ！勇者様ですか？もしかして」

勇者1「ああ、そうだが（俺のファンかな、まあ仮にも勇者の家系だし）」

町民A「やっぱり！頼みたいことがあるんですが…」

勇者1「うん？何だ？」

町民A「最近、夜になると西の洞窟から凄まじい鳴き声が聞こえてくるんです」

勇者1「なるほど、その洞窟に行つて確かめて欲しいと？」

町民A「はい！流石勇者様！物分かりが早い！じゃお願いします」

勇者1「えっ？あれっ…なんか無理やり頼まれた感じがするがいか…その前にレベル10まで上げよう」

―魔王1が居た世界とは別の世界2―

無数のクレーターが出来た大地に可憐なる魔王が立っていた

魔王1「あつけない…この辺りの魔物はもう全滅したか」

部下1「はい、そのようです（見境なく大魔法連発し過ぎ！しかも詠唱破棄とか何とか独り言ってたし何に影響されたんだ？）」

魔王1「あの竜皇の秘術のおかげでレベルがグングン上がるわ！」

部下1「今の戦闘で魔王1様レベル500越えましたもんね（何か自分も加護の影響でレベル上がりやすくなつてるといふ…）」

魔王1「そういえば、この地域の主である邪竜という魔物が浮遊大陸に居るらしいな」

部下1「ああ、竜皇様がおっしゃつてた魔物ですね。確かレベルは

1000ぐらいだったような」

魔王1「むむ：レベル1000：もう少しレベル上げるか」

部下1「じゃあ少し北に向かいましょう、ここに魔物はもう居ないですし」

魔王1「ふむ：わかった北に向かうとしよう」

部下1「あ！重要な事忘れてました：」

魔王1「なんじゃ？」

部下1「これから向かう北の大地はこの世界を構成するのに重要な役割を持つ世界樹の産地らしいので：」

魔王1「わかったわかった、あまり派手に暴れるなってことだな？」

部下1「その通りでございます（ホントに分かってるのかなあ：嫌な予感がする）」

ー神々の世界ー

女神1「それは本当ですか？」

魔神1「だから何度も言うが破壊神1が創造神1の配下数千億葬ったって報告が俺の部下からあった」

女神1「何と！彼女の気性の荒さは重々承知してましたが：毎回の事ながらここまでするとは：今度話合わないと！」

魔神1「まあ、元々そういう奴だからな仕方あるまい（その余波で幾兆個もの宇宙が消滅したというのは黙っておこう）」

女神1「すみません：つい：私ったら：」

魔神1「いや別にいいさ、そういうところが俺は好きなんだ」

女神1「え／＼／＼」

竜神1「ラブラブなところすまんが：本題に入っても良いかな？」

女神1「す：すみません！」

魔神1「お：おう」

竜神1「早速じゃが：独自に調査したところ、かつての封印戦争で封印した虚無神の封印が解かれつつある」

女神1「なんと、まあ：私の母がその戦いに参加してましたわ」

魔神1「俺の親父もその戦いの末期に参加したって言ってたな」

竜神1「ふむ：わしも当時の封印戦争に参加していたが：それは凄まじいものだった（この戦争をきっかけに今の奥さんと出会ったってのは黙っておこう）」

魔神1「で？なんでそれを俺たちに言うんだ？最下級神レベルの俺たちに」

女神1「ですわね」

竜神1「それは、まだ事を大げさにしたくないのとお前さん二人のご両親が神の世界においてかなりの重要な存在だからじゃ」

魔神1「なるほど：わかった」

竜神1「ふむ（物分かりが早い：流石父は66の6666乗個の魔神界を治める魔神王だけある）」

女神1「わかりましたわ！」

竜神1「よし（こちらも流石じゃ：母は100の5000乗個の女神界を治める女神王：一度その御身を見たが綺麗じゃったなあ：おつといけない）」

魔神1「で、俺たちに何をさせたいんだ？」

竜神1「まずそれぞれのご両親に、内密に報告してほしいのと、虚無神が放っているであろう虚無の軍勢をしらみ潰しに倒して欲しい」

魔神1「わかったぜ：それでは早速行動に移すか」

女神1「ですわね！（久しぶりにお父様とお母様に会えますわ！：でも魔神1様とは少し離れ離れに：）」

竜神1「それでは散会じゃ！」

破壊神1「虚無神か面白そうね：そういえば下僕1はちゃんと掃除してるかしら」

ー破壊神1の宮殿ー

下僕1「よしやと掃除半分終わったぞ！いやあこの多重展開ブラックホール式掃除機は使いやすい」

1魔王1が居た世界とは別の世界2ー

凄まじい爆風が魔王1中心に半径数十キロメートルに渡って吹いていた

魔王1「やっちゃった★てへぺろ」

部下1「やっちゃった★じゃ！ないですよ！どうするんですか！辺り一面火の海ですよ！」

魔王1「だってえ：ちよつと新しい魔法試したかったんだもん：グスンッ」

部下1「グスンッじゃありません！（ちよつと可愛いと思った自分が憎い）」

魔王1「ふん！別にいいではないか、レベルも900になったし★」
部下1「いやいや：まずいですよ流星にこれは」

ゴゴゴ：大地が裂けそこから凄まじい巨体の龍が現れた

樹龍「地上が熱いと思ったら：これはなんという有様だ！」

部下1「ぎゃー何か来たじゃないですかああ」

魔王1「そのようだな」

樹龍「これは貴様達の仕業か？」

部下1「いや：なんとうか：その（やっべえでかい顔だけで数キロメートルあるぞこれは）」

魔王1「うむ、そうだが？」

部下1「：反転蘇生魔法自分にかけて：魔法障壁20枚展開させて：準備おkだな★」

樹龍「ならば、問答無用！喰らえ樹龍砲！」

凄まじいエネルギーの柱が樹龍から放たれ魔王1をかすめていった
魔王1に3500のダメージ

魔王1「いきなりだなんて酷い！許さない…いくわよ！禁呪バスター
ーコメット！」

空から無数のエネルギーの球が樹龍に降りかかる、その数1000
樹龍に6900のダメージを与えた

樹龍「ぐぐぐ…なかなかやるな…ならば体当たりしてくれろ！圧
倒的な質量で押しつぶされるがよい！」

全長数十キロメートルある樹龍の体が音速を超えて、魔王1にぶつ
かっていった

魔王1「ふん…物理反転障壁展開！これでお終いよ」

樹龍「ぐあああ！なんだこれは！」

樹龍に9800のダメージ樹龍は倒れた

魔王1「成功したわね…これは向かってくる質量をそのまま相手に
返す魔法よ…自ら自滅するとは」

樹龍「なんという奴だこの私を倒すとは」

魔王1「まあ少しは申し訳ないことしたと思ってるけど…そっちが
いきなり攻撃してきたし」

樹龍「…」

部下1「魔王1様」

魔王1「どこに行ってたの？私の活躍を見過ごすなんて部下とし
て失格よ！」

部下1「すみません…それがこの焼野原になった世界樹の産地をど
うするか竜皇様に相談しに行ってたんです」

魔王1「ふむ…そうだったの…で？どうするって」

部下1「何か、本来は禁止らしいんですが時間を巻き戻す魔法で元

通りにできるっておっしゃってました!」

魔王1「なんだって! (それはすごいわね:私があゝの竜皇に勝った暁にはその魔法奪い取ってやる)」

樹龍「それは真か! 流石この世界を総べる竜皇様だ!」

部下1「はい! うちの魔王が本当にすみませんでした! さあ魔王1様も頭下げて謝って (後でどうなるか:怖い)」

魔王1「う:うむ:済まなかった樹龍よ:この通りだ」

樹龍「いや:もうよい:力有る者その使い方一つで守れるもの破壊できるものがあるというのだけ心に留めていて欲しい」

部下1「いやぁ良いことおっしゃる!」

魔王1「わかった心に留めておこう (片隅にだがな:)」

樹龍「それでは私はしばらく竜皇様が来るまで休んでおくとしよう」

魔王1「そうか:その巨体に効くかわからないけど:ヒール!」

樹龍が光に包まれ5000ポイント回復した

樹龍「おお、これは助かる」

魔王1「まあせめてもの償いだ:この戦いでレベルも上がったし」

部下1「魔王1様いいところあるじゃないですか!」

魔王1「うるさい! 禁呪ブラックボール!」

部下1「ぎゃあああああああ、次元扉さん今すぐ転移お願いしますううう!」

―魔王城地下―

次元扉「うん? 何か聞こえたような:おやつの時間か、そうそう異世界で手に入れた和菓子という物があるんだった」

―西の洞窟―

勇者1 「西の洞窟に着いたものの松明買うの忘れた…暗い…」

続く

レベル12（2話）で登場したキャラのレベル

魔王1 ↓950

部下1 ↓520

勇者1 ↓10

竜型の魔物1（竜皇） ↓8000

樹龍 ↓900

邪竜 ↓1000

破壊神1 ↓14000

下僕1（元大魔王） ↓14000

女神1 ↓12000

魔神1 ↓15000

竜神1 ↓18000

魔神王 ↓?

女神王 ↓?

虚無神 ↓?

次元扉 ↓?

レベル3ー魔王様はやっぱり成長しなかった(精神的に)(前書き)

読みにくいと思いますが、すみません！

レベル3―魔王様はやっぱり成長してなかった（精神的に）

―西の洞窟―

勇者1の攻撃↓うろうろする鎧に12のダメージを与え倒した

勇者1「この洞窟のモンスター強いな：MPと薬草が尽きかけてきたし一旦町に戻るか」

きゃあああああ

勇者1「何だ！あそこから声が！」

拳士1「虫が虫が…」

勇者1「え？この芋虫みたいな奴が苦手なのか：仕方ない（それにしてもこいつ胸でかい）」

勇者1の会心の攻撃↓芋虫1にダメージ27与え倒した

拳士1「あ、ありがとうございます！助かりました（かっこいい／＼）」

勇者1「で、お前はここで何してたんだ？」

拳士1「いやあ：ここでレベル上げしようかなあと思ってうろうろしてたら急に芋虫が…」

勇者1「そうか（松明持ってるな…）」

拳士1「あの？もしかして勇者様ですか？」

勇者1「ああ、そうだが」

拳士1「本当ですか！じゃあこれも何かの縁だし一緒に旅しましょう！（本当に勇者様だとは：やったあ！）」

拳士1が仲間になった

勇者1「あ、ああ：よろしく頼む（あれ：勝手にというか：まあ細かいことはいいか：松明持ってるし）」

拳士1「よろしくお願いします！あ、ちなみにレベルは15です！」

勇者1「え…（俺よりたけええええ！）」

―破壊神1の宮殿―

下僕1「パンツパンツ布団も干したし（いやぁ今日は良い超新星爆発日和で良く乾きそう）掃除完了っ！後は宮殿に湧く魔物をいつものように始末して終わりだな」

下僕2「下僕1様！」

下僕1「うん？どうした？（こいつ下僕2もかつては名のある大魔王って言ってたな…なんだっけなサタン…だっけ）」

下僕2「第3690番目の部屋で例のアレが出ました！始末お願いします！」

下僕1「わかった…クックク我の力思い知らせてやろうではないか！」

下僕2「流石、下僕1様！お願いします！（こいつは単純で扱いやすいし、さぼる時には重宝する奴だ）」

―破壊神1の宮殿・第3690番目の部屋―

体の大きさが直径1万数千kmはある、神々しい姿をした魔物が居た

下僕1「これはこれは…（伝わってくる力の波動から察するにほぼ我と互角かそれ以上なんだが…どうしよう…何か下僕2もどっかいっちゃうし）」

アレ1「ここはどこだ？貴様は何者だ？」

下僕1「我はこの宮殿の管理者であり、元大魔王である！（いつもならこれほどの奴は来るわけないんだが…久々に本気になるか）」

アレ1「元大魔王？何だかよくわからんが…次元の狭間で寝て起きたらここに居たというわけだ」

下僕1「ふむ…（こんな奴みたことないぞ、やはり世界は広いな）」

アレ1「まあ、よい…貴様はなかなかできそうだな、寝起きの体操変わりに暴れるか…運が悪かったな」

下僕1「ふん！全力でかかってくるがよい！寝起きの体操変わりだと！？我を舐めるなよ！」

下僕1「はあああああ、いくぞ…大魔王級魔法スターフレイム！」並みの恒星なら一瞬で破壊できるほどの熱量の塊が下僕1の手から放たれた

下僕1の攻撃↓アレ1へ1億のダメージ

アレ1「その程度の攻撃痛くも痒くもないわ！次元ごと切り裂かれるがよい！ディオネス・ディメンションリッパー！」

アレ1の攻撃↓下僕1へ94億のダメージ

下僕1「あ…（これ無理だわ…負けるわ…今の攻撃やばいわ）」

アレ1「ほほう…この攻撃を受けても涼しそうな顔をしてるな…なかなかやりおる」

下僕1「いや…これは（もう動けなくて諦めが着いているだけなんだが）」

アレ1「本気を出すか…」

下僕1「え…本気ってまさか力が数十倍に膨れ上がる系の第二形態になるとか？」

アレ1「ああ、その通りだ。ちなみに200倍程度になる」

下僕1「」

アレ1「ではいくぞ！はああああ我が内に秘めし古代神獣族の血を目覚めよ！」

アレ1の体が禍々しい光に包まれ、その現れたのは全長10万kmほどの大きさの神々しい鎧を纏った狼型の魔物であった

下僕1「…（今の変身した祭の力の余波だけで消し飛びそうだった…これは逃げるのみ！）」

ヒュンッ

破壊神1「下僕1ここに居たのね！あつ、もしかして…アレ1ちゃんじゃない！やっとみつけたあああ！」

アレ1「あ、あなたは…（このお方の住処だったか、これはまずい）」

下僕1「えええええ！お知り合いですか？（た、助かった…）」

破壊神1「知り合いというかわらわの元ペットじゃ、20万年前ほど前に散歩してる時逃げ出してしまったのう」

下僕1「ペット…」

破壊神1「とにかく、またよろしくねアレ1ちゃん？今度は逃がさないからね」

アレ1「わかった…」

破壊神1「わかった…じゃないでしょ？ワン！でしょ？」

アレ1「ワン！（私の儚い自由をさよなら…）」

破壊神1「あと、アレ1ちゃんのお世話は下僕1で決定ね！じゃれ合うほど仲良いし」

下僕1「じゃれ合うって…よろしく頼むアレ1よ（これはいつか食われるかもしれん）」

アレ1「わ…ワン！（何たる屈辱…いつか食ってやる）」

破壊神1「うんうん、微笑ましいわ！そうそう掃除完璧だったからご褒美に下僕1ちゃんのレベル上げてあげる！はいっ」

下僕1「光に包まれレベルが10万上がった」

下僕1「10万って！？あ、ありがとうございます！」

破壊神1「さてと、ちょっと宮殿で休んでからまたでかけるわ、新しい玩具も見つかったしね（虚無神…）」

下僕1「わかりました！ゆっくりお休み下さいませ…」

破壊神1「その前にあの二人組はどうしてるかしら」

1 魔王1が居た世界と別の世界21

黒い塊が音速の数百倍の速さで空を滑空していた

魔王1「やっと見えてきた！あれが邪竜が住む浮遊大陸ね！」

部下1「はい：（とうとうか魔王1様がレベル1010で自分が670、ギリギリいけると思うが）」

魔王1「さっきから思ってたんだけどあの浮遊大陸の周りに黒い光点が無数にあるわね」

部下1「たしかに：近づいてきたらわかりますよ（嫌な予感が）」

魔王1「ちょっと遠距離魔法かましてみる」

部下1「え？待ってくださいいいいってもう唱えてるし！」

魔王1「古代魔法カオスティックホーミングフレア！」

魔王1から赤と黒が混ざった色のエネルギーの球が無数に放たれ、数十秒後浮遊大陸周辺に着弾

浮遊大陸から数千の黒い光点がこちらに向かってきた

部下1「何かいっぱいきたあああ！」

魔王1「ほほう：やっぱりあれは魔物のようね、レベル上げには丁度いいわ！いっぱいいるし」

2時間後

魔王1「これで最後ね！ほれっフレア」

魔王1の攻撃↓黒い光点その9999番に5100のダメージを与え倒した

部下1「やっと全滅させましたね：（まさか1万体いるとは思わなかった）」

魔王1「ちょっと時間かったわね」

部下1「休憩しましょうか浮遊大陸で、ね！魔王1様」

魔王1「さて：特大魔法のチャージ完了つと、あの規模の浮遊大陸ならこの魔法で破壊できるかな？多分。」

部下1「おっしゃってる意味が：まさかあの幅数百kmはある浮遊大陸を吹き飛ばすつもりじゃ」

魔王1「だってえ、邪竜を探すの面倒臭いから住処全部吹き飛ばしておびきよせようかな★って」

部下1「上目遣いずるい…（てか樹龍さんの戦いで何も学んでなかったああ）」

魔王1「何か言った？」

部下1「いや何でもないです」

魔王1「じゃあいつくね★特大魔法ブレイズキャノン！」

花火のように浮遊大陸が跡形もなく吹き飛んだと同時に、漆黒の竜がこちらに向かってきた

魔王1「やっぱりこの方法で正解だったわね★」

部下1「ですね…さて観戦モードに移行します！」

邪竜「貴様らか！よくも寝ているところを不意打ちしおって、しかも浮遊大陸事吹き飛ばすし、私の眷属1万體は倒すし、八つ裂きにしてくれる！」

部下1「邪竜さん…」

魔王1「全長10kmほどか…あの樹龍より小さいけど、力はこっちが上だわね」

邪竜「何をごちゃごちゃと！いくぞ！」

邪竜の攻撃↓魔王1へ2000のダメージ

魔王1「うーん、ちょっとレベル上げすぎたかな…全然痛くないや、はいっアイスニードル×100本」

魔王1の攻撃↓邪竜1へ8900のダメージ

邪竜「うっ…」

魔王1「はいっもういっちょう、ライティングソード×200本」

魔王1の攻撃↓邪竜1へ10900のダメージ

邪竜「がっ…」

魔王1「これで止めね★星魔法スタースラッシュ」

魔王1の攻撃↓邪竜1へ12900のダメージ、邪竜は倒れた

邪竜「くそおおお…」

魔王1「ふう…弱かったわね…あ、もういいわよ部下1出てきなさい」

部下1「はいっ、いやあ遠くから観戦してましたが魔王1様が圧倒的でしたね！」

魔王1「まあ、当然ね！さて次は、溶岩竜、古代竜、魔竜…とどれから手をつけようかな★」

部下1「えーと、竜皇様の貰った凶鑑によると…溶岩竜がレベル2300・古代竜がレベル3000・魔竜がレベル5200って書いてあります」

魔王1「なるほど…てかいつの間にそんな便利な凶鑑貰ったのよ！よこしなさい！」

部下1「駄目です！魔王1様はすぐ汚すし失くすし自分が持つてます！」

魔王1「生意気な！特特大魔法ジオレスキャノン！」

部下1「ええええええ今まで一番強い魔法を放つなんて、ぎゃああ次元扉さああん今すぐ転移を！（この本の最後のほうに書かれてた竜皇第二形態ってなんだろう？レベル8万ってなってたけどまさかね…）」

―魔王城地下―

次元扉「うん？また気のせいかな、あ！茶柱が立ってる今日は良いこ

とありそうだな」

―西の洞窟―

勇者1「あの、そろそろ腕離してくれないか？（胸当たってるし…）」

拳士1「だって…芋虫ばかり出るんですもん！」

勇者1「うむむ…（男としてはうれしいが…これではまともに戦えない困ったな）」

―破壊神1の宮殿・寝室―

破壊神1「やっぱりあの魔王1と部下1は面白いわね！ふあああゝあ、さて寝るかな…」

続く

レベル13（3話）で登場したキャラのレベル

魔王1 ↓1200

部下1 ↓710

勇者1 ↓10

拳士1 ↓15

竜型の魔物1（竜皇） ↓8000 ↓第二形態8万

邪竜 ↓1000

黒い光点（邪竜の眷属） ↓500

溶岩竜 ↓2300

古代竜 ↓3000

魔竜 ↓5200

破壊神 1	↓ 1400万
下僕 1 (元大魔王)	↓ 11万4000
下僕 2 (元大魔王サタン?)	↓ 56000
アレ 1 (破壊神 1 のペット)	↓ 16000 ↓ 第二形態 320万
虚無神	↓ ?
次元扉	↓ ?

レベル4ー魔王様ピンチ

ー神々の世界・魔神界・魔神王宮殿ー

魔神1 「…ということらしい、親父」

魔神王 「封印が解けかかっているとは…これは戦の準備をしておいたほうが良さそうだな」

魔神1 「それにしても、親父また強くなったんじゃないか？」

魔神王 「当たり前だ！日頃の鍛練を欠かさずしてるからな！はっはっはっ」

魔神1 「そのおかげで息子が近づけないほど強くなってどうすんだ…（何かでかくなってるし）」

魔神王 「お前も私に近づけるよう励むんだぞ！」

魔神1 「一体何億年かかるやら…（確かに最近レベルアップを怠っていたからな、後で神々の迷宮に行って鍛えるか）」

魔神王 「さて…折角来たんだ久しぶりにお前の母であり私の妻である魔神王妃と三人で食事でもするか！」

魔神1 「ああ…わかった（母君かあ久しぶりに会うな）」

魔神兵 「魔神王様！！先ほど敵性神界30億個制圧したと魔神大元帥様より報告がありました！」

魔神王 「ほほう、良くやるな…あの付近の神界を制圧するとは、褒美に宮殿の庭で飼っている狼型の神獣3兆匹やろうではないか！」

魔神兵 「ははっそのように伝えておきます！」

魔神王 「魔神大元帥は確か動物好きだったからなこれは喜ぶぞ、はっはっはっ！」

魔神1 「太っ腹だな親父」

魔神王 「主君足る者ケチケチしてられんからな！さあ食事に行くとうしょうか！」

魔神1 「…（女神1は元気にしてるだろうか）」

―神々の世界・女神界・女神王宮殿―

女神1「…ということらしいですわ、お母様」

女神王「ふむ…封印が…」

女神1「私も精一杯協力させていただきますので、何なりとおっしゃって下さいね」

女神王「お前は大事な娘なんだから何も心配しないでいいのよ、この女神王であるお母様に全て任せておきなさい」

女神1「わかりました…（お母様ったらいつも子供扱いして!）」

女神王「そうそうお前の姉である女神2の結婚相手が決まったわ」

女神1「え!姉上が!」

女神王「うむ、相手は私が選んだ聖神王という方で私が治める領土の数十倍を治め、由緒ある聖神皇の家系に連なる方よ」

女神1「なんと!（お母様が選んだ相手と結婚か…私は姉上のようににはならない!魔神1様と絶対に結ばれるんですから!）」

女神王「あなたにも私が良い相手見つけてあげるから安心しておきなさい」

女神1「いや…私は…」

女神王「さて、久々に会えたのですしお食事に行きましょうか」

女神1「はい（はぁ…私には魔神1様という心に決めた相手が居るんです!っていつか言わねば）」

―神々の世界・竜神界―

竜神1「お〜い帰ったぞ〜」

竜神1妻「あら、あなたお帰りなさい!ちゅっ」

竜神1「おいおい年甲斐もなく…」

竜神1妻「いいじゃありませんか、若い頃なんてもっと」

竜神1「わかったわかった（年は取っているが見た目は出会った当時のままだから余計たちが悪いのう）」

竜神1妻「お疲れのようだし、二人でお風呂入りましょう！そこでお話聞かせてくださいね」

竜神1「ああ…（これは他人様には見せられないな）」

破壊神1の宮殿・寝室ー

破壊神1「うゝん、起きたことだし虚無神の手がかりで探しにいくかな、来なさい下僕1！」

下僕1「ははっ（我ながら光の速さを超えた速度で呼び出しに応えられるとは…すごいのか？）」

破壊神1「わらわは出掛けるからアレ1ちゃんの世話とゴミ出しと魔王1らの監視お願いね」

下僕1「かしこまりました！（魔王1と部下1だけ？よほど気に入ってらっしゃる）」

破壊神1「うむ、よい返事じゃそれでは行ってくる」

下僕1「行ってらっしゃいませ！（さてとまずアレ1にエサやりに行くか）」

破壊神1の宮殿・アレ1専用の小屋ー

アレ1「ZZZ…はああゴッド・ディメンション！」

アレ1を中心に半径100光年ほどの範囲が次元事吹き飛んだ↓下僕1に3211億のダメージ

下僕1「うがあああっ！！残りHP1に…うう危うく滅するところだったわ、寝ながら攻撃とは何て奴だ！（用心して絶対大魔王級障壁展開してて良かった）」

アレ1「…食ってやる…ZZZ」

下僕1「ビクッ…なんだ寝言か…破壊神1様の前ではワン！って言

ってるくせに（それにしても、なんで第二形態のまま寝てるんだ）
アレ1「ZZZ：はああアルティメット…」
下僕1「やばいぞ！何かさっきより凄まじい力を感じる！エサだけ置いて逃げるぞ！」

―破壊神1の宮殿・下僕1の部屋―

下僕1「ふう、ゴミも出してエサも上げたことだし休憩がてら（HP回復しないとな…まともに動けん）奴らの様子でも見るか、大魔王ビジョン！」

―魔王1が居た世界と別世界2―

魔王1「ちよつと暑くない？」

部下1「そりゃ溶岩竜が住む溶岩地帯ですからね（障壁20枚展開してるのにこの暑さとは）」

魔王1「うゝん衣脱いじゃえ！」

部下1「え…（なんてけしからん体してるんだっ！というより衣脱いで変わるもんなのか？）」

魔王1「これで多少マシになったかな、溶岩ってこんな熱かったっけ？」

部下1「溶岩竜の発する力の影響で熱さが増してるんでしょう」

魔王1「なるほど…それは尚更早く倒した方がいいわね、もうレベルも2300越えたし…いいかな」

部下1「え…何がですか？（まさかまた派手な魔法使っておびき寄せるつもりじゃ）」

魔王1「ほゝれ詠唱破棄！極大氷魔法アイスクヤノン！」

魔王1から放たれた太さ1kmはある冷気のビームが前方にある巨大火山に当たったと同時に凄まじい冷風の風が吹き、辺り一面氷

に覆われた

部下1「あゝあやっちゃった、てか自分が居るのに一言ぐらい言つて下さいよ!」

魔王1「うるさいな、いいじゃない!これで涼しくなるし、溶岩竜もきつと来るわ!」

凍ったはずの巨大火山が動き出しそれと共鳴するよう周りの巨大火山も動き出していた

部下1「嫌な予感が…早めに逃げる準備をしておこう」

溶岩竜×100匹「貴様らか!この辺り一帯を凍らせたのは!?」

部下1「やっぱり…てか溶岩竜何匹いるんだああ」

魔王1「うむ、そうだが?」

溶岩竜×100匹「そうか…良い度胸だ!溶岩竜族を怒らすとは…我らに飲み込まれ消し炭になるがよい!」

部下1「…(何この魔王1様、勝てる見込みあるからあんな態度なの?それとも…)」

魔王1「さてと…ここは戦略的撤退するわよ!!溶岩竜達の魔力の所為で次元扉の転移は使えないからよろしくね部下1」

部下1「ええええええ! (速度アップの魔法重ね掛けしないと!)」

溶岩竜×100匹「待てえ!激しい炎の息×100」

溶岩竜の攻撃↓部下1に3900のかすりダメージ

部下1「ぎゃあああああ熱い痛い!魔王1様はもうあんなに遠くに逃げてるし!待って下さい!」

―西の洞窟―

拳士1の攻撃↓巨大吸血蝙蝠に40のダメージを与え倒した

勇者1「つ…強いな拳士1(虫以外なら平気なんだな)」

拳士1「ありがとうございます♪でも勇者様ほどではありませんよ」
勇者1「それはどうも（これは嫌味なのか：さつきから拳士1ばかり先制攻撃するし正直虫型の魔物以外出番が無い）」

拳士1「あ、もうすぐ最深部っぽいですね」

勇者1「そうだな、（拳士1がガンガン魔物倒すおかげでレベルも上がってちよつとは余裕が出てきたし悪いことばかりではないな）」
洞窟の主「ガオオオ！！」

勇者1「あの奥から声がするな！：こいつが鳴き声の正体か！（うん？暗くてよく見えん）」

拳士1「この魔物は：まさか！」

勇者1「なんだ？どうした？」

―魔王城地下―

次元扉「ZZZ」

続く

レベル14（4話）で登場したキャラのレベル

魔王1 ↓2300

部下1 ↓1200

勇者1 ↓10

拳士1 ↓15

洞窟の主 ↓？

竜型の魔物1（竜皇） ↓8000 ↓第二形態8万

溶岩竜 ↓2300

破壊神1 ↓1400万

下僕1（元大魔王） ↓11万4000

アレ1 (破壊神1のペット)	↓160000	↓第二形態320万
女神1	↓1200万	
女神2 (女神1の姉)	↓?	
魔神1	↓1500万	
魔神大元帥	↓?	
魔神兵	↓?	
狼型の神獣	↓?	
竜神1	↓1800万	
竜神1妻	↓1410万	
魔神王	↓?	
魔神王妃	↓?	
聖神王	↓?	
聖神皇	↓?	
女神王	↓?	
虚無神	↓?	
次元扉	↓?	

レベル4ー魔王様ピンチ（後書き）

魔王一行の出番が少ないですね…登場キャラ増やし過ぎて処理能力が限界に

レベル5―魔王様は天才！いや神才？

―魔王1が居た世界とは別の世界2―

魔王1

「やっと溶岩竜達から逃げ切れたわ…あれ？そういえば部下1はどこかしら、魔王ビジョン展開！」

レベルが上がったおかげで魔王の知覚能力（魔王ビジョン）で半径666km先の出来事までリアルタイムに知ることが可能なのであった

部下1

「魔王1様…何処に行ったんですか…（何とか逃げ切れたものの…深手を負ってしまった）」

魔王1

「居た居た、ここから280kmほど離れてるわね…（てか魔王ビジョンの能力が数百倍にパワーアップしててびっくりだわ！もっと早く使っておけば良かった…）」

部下1

「自動回復するまでここで待機しておくか…（まあ仮にも上級魔族だし、その上級魔族の再生能力ですぐ回復するだろう）」

魔王1

「回復するまで待つのか…試しにパワーアップした魔王ビジョンと回復魔法を複合させてどうなるか、やってみるかな（失敗しても部下1だし…）」

部下1

「う…ん回復速度遅いなあ…やっぱり溶岩竜の魔力を含んだ攻撃が再生速度遅くしてるのか」

魔王1

「よし新しい魔法理論完成！さていくわよ下僕1！魔王ビジョン十回復魔法でロングレンジヒール！」

部下1の体が淡い光に包まれた↓部下1のHP&MPが全快した

部下1

「うん？なんだ！体の傷がみるみる回復していくぞ！しかもMPまでも！」

魔王1

「お、成功した！流石自分！この遠距離による魔力の減退もなく、精度も完璧、時間差も数秒！回復系の魔法でここまで遠くの個体に使用したのは初めてだわ」

部下1

「すごい！完全に回復した（この魔力の質は魔王1様だな）魔王1様ありがとうございますううう！！！」

魔王1

「う、うるさいわね！ロングレンジグラビティプレス！」

魔王1の攻撃↓部下1へ19000のダメージを与えた

部下1

「ぎゃああああ」

魔王1

「やったあ☆また成功した！もう一発ぐらいいけるわね！古代魔王魔法十魔王ビジョンで！ロングレンジシャドウグランデ！」

部下1

「もう一発だと！ふん！魔法障壁40枚展開！（なんか、魔王1様のおかげで魔法耐性上がっているような）」

魔王1の攻撃↓部下1へ29000のダメージを与えた

部下1

「やっぱり、それでも痛いですううう！」

「魔王1が居た世界・西の洞窟」

拳士1

「あ、やっぱりこの洞窟の主さんですよ！でも何か怪我してますね…」

洞窟の主

「グルルッ！」

勇者1

「確かに、この洞窟の主なのに何故怪我を？天敵なんぞ居ないはずなのに…うん？主のうしろになんか居るぞ」

拳士1

「あ、ほんとだ！人影が見えますね」

勇者1

「しかし、こいつのおかげで近づけないな」

拳士1

「ですね、主さん弱ってるしこっちを警戒してますが…襲ってこようとはしてませんね」

勇者1

「ふむ（何を考えてるんだ？）」

拳士1は鉄の爪&武胴着をはずした

勇者1

「これはこれは（全体的に体が締まっているが女性特有の魅力的な胸とお尻の張りもあり何とも…）って何で下着姿に！？」

洞窟の主

「グルルッ？」

拳士1

「大丈夫ですよ！こっちは攻撃しませんからね！だから主さんの後ろを確認させて下さいね」

勇者1

「おいおい、いくら主の警戒心解こうとして下着にならなくても…（そういえば暗いのに見えるとは男の本能恐るべし）」

拳士1が洞窟の主の後ろに回り込んだ

勇者1

「おお！成功した！それで何が居たんだ？」

拳士1

「勇者様ああ！銀髪の小さい女の子が怪我をして倒れてます！（それにしても何て美少女なんでしょう…大人になったらさぞかし美人に）」

勇者1

「何だと！？（洞窟の主の仕業か？いや違うな…）」

拳士1

「葉っぱがいっぱい乗せられています（なんの葉っぱだろう…やくそうに似ているけど）…きつとこの主さんが助けてずっと看てたのだと思います！ですよね！主さん？」

洞窟の主

「グルルッ…」

勇者1

「やはりそうだったか…（人間の子？を匿い他の魔物から守ってたんだな）」

拳士1

「どうしますか！一旦町に戻って治療しないと、ここに居ては…」

勇者1

「そうだな…」

勇者1は銅の剣&皮の鎧&皮の盾をはずした

拳士1

「え！何故勇者様もお脱ぎに？（素敵な体／＼／＼）」

勇者1は洞窟の主に頭を下げながら主に近づいて行った

勇者1

「この通りだ…その女の子は絶対助けてみせる！だからこちらに渡してくれないか？このままじゃ…」

拳士1も頭を下げ

拳士1

「私からもお願いします！町で治療しないと手遅れになってしまいますよ主さん！」

洞窟の主

「グルル…グルッ」

洞窟の主は、後ろに下がり体を休めるように静かに眠った

勇者1

「ありがとう…ゆっくり休むがよい（魔物も誠意をみせれば分かってくれる奴も居るんだな）」

勇者1は眠った洞窟の主の前に、ありったけの薬草を置いた

拳士1

「主さん…」

勇者1

「大丈夫、今までこの女の子を守る為に戦い続けられて休むだけだろう…（しかし、この傷では長くはないか…拳士1には黙っておこう）」

拳士1

「ですね！またここに来ましょうね勇者1様！」

勇者1

「うむ…それではその子連れて町に戻るとしようか」

拳士1

「はいっ！」

勇者1

「忘れてた…せめて服だけ着てくれないか？（我ながら紳士な態度…勇者はこうでなくては）」

拳士1

「あっ！すみません／＼（もうお嫁にいけない、あ！でも勇者1様のお嫁さんになるから別にいいか）」

拳士1は武胴着を装備した

勇者1

「よし、全速力で洞窟脱出だ！（はあ…こういう時脱出魔法があればな…）」

「……？」

その頃破壊神1は破壊神ビジョンで4京個の多元宇宙・4京個の魔界・4京個の天界・4京個のその他の世界で虚無神の力の波動が無いか調べていた

破壊神 1

「うゝん虚無神の力の波動なかなかみつからないわね…やっぱり低位次元階層じゃないのかしら…」

1 魔王 1 が居た世界とは別の世界 2 -

部下 1

「やっと合流できましたね！」

魔王 1

「ふぁゝあ…遅いわよここに来るまで 1 時間もかかって何してたのよ」

部下 1

「だって…280km も離れてるし手負いだし…（折角回復させてもらったと思ったらなんか実験台として攻撃してくるし）」

魔王 1

「口答える気？生意気な…（まあこんな奴でも居なれば居ないでちょっと寂しかったけど…）」

部下 1

「すみません！！いやあでも魔王 1 様また新しい魔法理論確立させましたねゝさすがです！」

魔王 1

「あ、ありがとう…」

部下 1

「で…溶岩竜達どうしますか？ 1 体 1 ならば魔王 1 様レベル 2300 だしあっちも同じくらいなので問題無いですが…100 体も居るとなると」

魔王 1

「ああ、それならもう攻略法思いついたわよ」

部下 1

「え！どんな攻略法ですか？」

魔王1

「うん、ここ600km離れた場所から特大魔法のレンジ版を撃ってたおそうかなあと」

部下1

「おお！それはすごい！（でも少し卑怯のような）」

魔王1

「まあ天才を超えた神才だからね当然よ！あと少しで特大魔法のレンジ版完成するわ」

5分後

魔王1

「はいっ完成★」

部下1

「本当にすぐ完成しましたね」

魔王1

「ふっふっふ…見てなさい溶岩竜共…わけもわからず攻撃を受け滅するがいいわ」

魔王1が光だした

部下1

「なんという魔力だ（並みの者じゃこの魔王1様が発する魔力で気絶…いや消滅するほどだ）」

魔王1「さくて行くわよ！溶岩竜100体ロックオン！」

部下1

「えええ！一体ずつじゃなくて100体まとめてですか？！」

魔王1

「当たり前よ！そして今まで元も強い魔法よ…まあ爆心地から周囲

1500kmには影響あると思う」

部下1

「えーと1500kmということは…ここが600km地点だから…ぎゃああああ魔法障壁展開しないと！」

魔王1

「チャージも完了つと★いくわよ炎騎士イフリートの力を我に貸したまえ…」

部下1

「イフリートって炎系の魔法じゃ？まさか炎属性の防御が高い溶岩竜に敗れてその魔法を撃つとは…」

魔王1

「そうよ…この私に屈辱を与えてくれたお返しをしないとね★まさか炎系の魔法でやられるなんて思ってもないでしょう」

部下1

「魔王1様…外道なんだけどなんかカッコいい！」

魔王1

「くらいなさい！！特大魔法・炎剣フレイムソーディアス×100本」

溶岩竜が住む溶岩地帯上空に突如凄まじい熱量を帯びた巨大な炎の剣が100本現れ、それぞれ100体の溶岩竜に向けて降下していた。

溶岩竜×100体

「なんだ！？これは」

魔王1の攻撃↓溶岩竜×100に120万のダメージを与えた

溶岩竜×100体

「うがああああ！！なんという威力の魔法だ…この魔力…」

先ほど我らに戦いを挑んだあいつか!？」

溶岩地帯が赤い閃光に包まれ、凄まじい爆風が吹き回り一面を巻き込んでいった

部下1

「…(やべええ魔王1様やべええ、なんて威力の魔法だ)」

爆風が魔王1&下僕1付近にまで迫る

部下1

「ぎゃあああ、熱い!爆心地から600km離れてるのにこの爆風だけで溶岩竜に受けた炎系の攻撃より熱いぞ!」

魔王1

「はぁ…はぁ…やったわね…(ちょっとMP使い過ぎたわ)」

爆風が止んだと同時に、溶岩地帯はまるまるクレーターが無数にある大地とそれ以外は平らな更地に様変わりしていた

部下1

「これは…なんという…(溶岩地帯は数百いや1000kmの範囲に渡ってあったんだぞ?それがこんな…しかもまだ燃えている)」

魔王1

「ちょっと疲れたわ…部下1…休める所に…つれ…て…いきな…さ…い」

部下1

「魔王1様!?(これだけの魔法使ったから当然か…久しぶりに魔王城に戻るとするか)次元扉さああああん!」

―魔王城地下―

次元扉

「おお、部下1の声がするぞ！よくし待っておれよすぐここに転移させてやる」

シュンッ

部下1

「戻ってきたのか？」

次元扉

「おお久しいな！うん？その抱えてるの魔王1か！？」

部下1

「はいっ！ちょっと無理して魔法使って倒れてしまったみたいです」

次元扉

「そうかそうか…それは早く休ませたほうがいいな（それにしても凄まじい力の波動じゃレベル4000と2200とは…この世界の理を超えた存在になってるぞ…）」

部下1

「ですので、魔王1様を寝室まで連れていきます！」

次元扉

「ふむ！（それでも…かつてわしが戦った大魔王の力はもっと凄かった）」

―魔王城寝室―

部下1

「ふう…ここでゆっくり休んで下さい魔王1様」

魔王1

「ZZZやったあ…レベルアップうう…ZZZ」

部下1

「ははっ（うん？　そういえば溶岩竜を倒したおかげでレベルアップしているな）」

魔王1

「Z z z…」

部下1

「寝顔は可愛いらしいのに…（さてと久しぶりにこの世界に戻ってきたことだし、魔王1様が休んでいる魔王領の様子でも見にくくな）」

「魔王1が居る世界・次の町」

勇者1

「あの西の洞窟で見つけた銀髪の女の子、医療施設兼ね備える教会に預けたし…これで大丈夫かな」

拳士1

「ですね…私達も少し休みましょうか？」

勇者1

「うむ、おっとその前に…夕飯食べないとな！」

拳士1

「はいっ！？　お腹ペコペコです…」

勇者1

「ははは、よし今晚は俺の奢りだ！　たらふく食べろよ」

拳士1

「ありがとうございます！　よーしいっぱい食べちゃうぞ（甲斐性もあるなんて素敵／＼）」

「魔王1が居る世界・次の町・医療施設兼ね備える教会」
銀髪の女の子

「やつら……Z z z…封印し…おって…許さんぞ…Z z Z」

教会神父

「うん？何か聞こえたような」

「????？」

破壊神1

「あああ！やっと虚無神の力の波動見つけたわ！えいとどれどれ？あら辺鄙な次元にある世界ね、まあいいわ…待ってなさい私の玩具！」

「魔王城寢室」

魔王1

「…ZZZ…くらいな…さい部下1!…ZZZ」

続く

レベル15（5話）で登場したキャラのレベル

魔王1

↓4000

部下1

↓2200

勇者1

↓10

拳士1

↓15

教会神父

↓3

銀髪の女の子

↓?

洞窟の主

↓18

溶岩竜

↓2300

破壊神1

↓1400万

虚無神

↓?

次元扉

↓?
.

レベル51魔王様は天才！いや神才？（後書き）

キャラがごちゃごちゃに…すみません

レベル6―魔王様はお休み中

―とある宇宙・宇宙帝国皇帝旗艦ブリッジ―

宇宙帝国皇帝

「はっはっは、あと一つ銀河を制すればこの宇宙は完全に私の物になるのだ！」

宇宙帝国皇帝旗艦ブリッジオペレーターA

「皇帝！！緊急事態が！」

宇宙帝国皇帝

「何事だ！？」

宇宙帝国皇帝旗艦ブリッジオペレーターA

「α超銀河団に発生した次元の穴より超高エネルギーが検出されました」

宇宙帝国皇帝

「どれぐらいのエネルギー量だ？（ふん！我が戦闘種族は生まれながらにして恒星を砕く力を持っているのだぞ…多少の事など…）」

宇宙帝国皇帝旗艦ブリッジオペレーターA

「それがビッグバンに匹敵するエネルギーです…このまま行けばこの宇宙が消滅します！」

宇宙帝国皇帝

「なにいいいいい！宇宙が消滅？ビッグバン？（あと一歩でこの宇宙の覇者になれたのに…なんてことだ）」

宇宙帝国皇帝旗艦ブリッジオペレーターA

「次元の穴…直径1万光年に拡大！時間がありません…この宇宙より次元転移を使って脱出しましょう！」

宇宙帝国皇帝

「くそっ！宇宙中の通信施設とこの旗艦を超光速通信回路に繋げ！」
宇宙帝国皇帝旗艦ブリッジオペレーターA

「はっ回路繋げました…次元の穴…直径100万光年に拡大！」

宇宙帝国皇帝

「全宇宙帝国軍&臣民に次ぐ今すぐこの宇宙から脱出しろ：以上だ！」

宇宙帝国皇帝旗艦ブリッジオペレーターA

「それでは：宇宙帝国皇帝旗艦次元転移を行います3・2・1：」
宇宙帝国皇帝

「さらば我が故郷の宇宙を：」

宇宙帝国皇帝旗艦が別次元の宇宙に転移したと同時にとある宇宙を含む8798京個の他宇宙全体が閃光に包まれ消滅した

「???？」

虚無神四天王1

「ああゝまたやっちゃった低位次元階層での力の抑制難しいわ（息するだけで消滅するとはなんて脆いんだ）：ちっこれでは虚無神様見つけられねえな」

シュンッ

虚無神四天王2

「あらあら：何やってんの？四天王1：私たちの目的忘れたの？」

虚無神四天王1

「すまねえ」

虚無神四天王2

「封印から漏れた虚無神様は低位次元階層のどこかの世界に顕現して居るはずなのよ？万が一その世界事消滅させたらどうするのよ」

虚無神四天王1

「だから済まねえって言うてるじゃなえか！ドンッ」

虚無神四天王1の壁パンチ↓低位次元階層の9711那由多個の多元宇宙、3499那由多個の天界、1902那由多個の魔界、67

89 那由多個のその他の世界、高位次元階層のその他世界×772
1京個が消滅した

虚無神四天王2

「はあ：今言ったばかりでしょ？：仕方ないわね：はいっ」

虚無神四天王2の虚無の力発動↓虚無神四天王1の壁パンチによつて破壊された世界が全部元通りになった

虚無神四天王1

「すまねえ：」

虚無神四天王2

「やっぱりあなたには向いていないわね：虚無神様探索は私に任して：あなたは虚無の城で虚無の軍勢を作り出すのと、虚無神四天王3・4の封印解除お願いするわ」

虚無神四天王1

「ああわかった！それなら任せておけ！」

虚無神四天王2

「じゃあお願いね（これだから脳筋は困るのよ）」

↓魔王1が居る世界・次の町・回復施設がある教会↓

銀髪の少女

「：ここはどこじゃ？」

勇者1

「ここは教会だ、それよりもやっと目覚めたか！」

拳士1

「良かったあ！あの洞窟の主さんに伝えてあげないと！」

勇者1

「あ：ああ（まずいな洞窟の主はもう：）」

銀髪の少女

「うん？なんだ貴様ら：確かわらは：神達と戦い封印され：」

拳士1

「動揺してますね（こんな小さな女の子があんなところに居たんだし当然ですね）」

勇者1

「そうだな（神達との戦い？はて：そういう夢でも見てたのか）」

銀髪の少女

「そうか：やっと理解できたぞ：封印が弱まりこの世界に顕現したということか」

拳士1

「もう大丈夫だからねーよしよし」

銀髪の少女

「なっ：気安く触れるな！わらは虚無神であるぞ！貴様らが認識できないほどの存：在：痛っ！」

拳士1

「ご：ごめんなさいっ（髪の毛サラサラだし羨ましや：）」

勇者1

「おいおい、まだ怪我は完全に治ってないんだぞ、その命を守る為に奴がどれだけ：（虚無神？聞いたことない神だな）」

銀髪の少女

「うん？なんだ？」

説明タイム

勇者1

「：：そういうことだ」

銀髪の少女

「そうか：その魔物には悪いことしたな（ふむ我が配下にしてやろう）」

拳士1

「あっ、でもあれから何日も経ってるんだし主さんも回復してるんじゃない？様子見に行きましょう！」

勇者1

「それは…」

銀髪の少女

「うむ、わらわもそやつのおかげで助かったみたいだし…一緒に行くでしょう」

勇者1

「え！？お前まだ全回復してないし…子供…だしここでゆっくり」

銀髪の少女

「はっはっは、わらわを誰だと思っている？本体は封印されているとはいえ虚無神じゃぞ！こんな脆弱な姿でもそれなりに力はあるはず」

拳士1

「はいはい…虚無子ちゃんは大人しくしてようね（我ながら可愛いネーミングセンス！）」

銀髪の少女改め↓虚無子

「虚…虚無子じゃと！？何て無礼な…まあ…よい！そんな口聞けるのは今の内じゃ！現在のわらわのレベル見せてやろうではないか！」

勇者1

「……レベル1なんだが…」

拳士1

「……ですね…」

虚無子

「レベル1…はっはっは…」

勇者1

「とりあえず後2～3日は休んで、それから西の洞窟に行こうとしよう、な虚無子？」

虚無子

「お前までも…虚無子と呼ぶとは…むう仕方ない今は休むとしよう」
拳士1

「いいこですね〜ゆっくり休むんでちゅよ〜」

勇者1

「おいおい、いくらなんでも赤ちゃんじゃないんだから」

虚無子

「でちゅよ〜だと!?!?…くっ…眠気が…zzz」

拳士1

「ふう、可愛い子ですね勇者様!」

勇者1

「ああ、そうだな…(拳士1は子供好きなんだな)」

拳士1

「さてと、これからどうしますか?」

勇者1

「ちょっとレベル上げでもするか!最近上がってなかったしな(拳士1には追いつかないと)」

拳士1

「了解です!じゃあ早速外に出ましよう!」

1 魔王城より南400km付近・魔王領最南端の砦1

部下1

「魔王領視察は、この砦で最後かな(うんうん思ったより魔王領は上手く統治されてるな、これも先代魔王様の施政のおかげだ)」

魔将1

「これはこれは部下1様お久しゅうございます(うん?凄まじい力の波動を感じるぞ…確かレベルはわしと一緒ぐらいなはずだったが)」

「

部下1

「ああ、久しぶりだな魔将1変わらないか?(確か魔将1は中級魔

族でありながらたたき上げで將軍の位にまで上り詰めた猛將であつたな」

魔將1

「はい、この砦の南にある南方諸国の奴らも大人しいですし特に異常はありません（よしここは一つレベルどれくらいか聞いてみるか）」

部下1

「そうか、それは良かった（南方諸国は確か砂漠の民が治める国々であつたか）」

魔將1

「あの一つお伺いしたいのですが…」

部下1

「うん？なんだ？」

魔將1

「部下1様のレベルは今いくつでしょうか？何か力の波動が強まってるような気がして…（私は60ぐらいだからそれ以上か以下はないだろう）」

部下1

「ああ、やっぱりわかるか！それでも力を抑えているんだが…（魔王1様と一緒に居るだけでレベルだけ上がってるなんて言えやしない）」

魔將1

「力を抑えてこれほどの…（ということはレベル80前後か！まさか…それほどまでレベルが上がっているなど…）」

部下1

「で、えーと今のレベルは…」

魔將1

「はい…ゴクリ」

部下1

「2200だ」

魔将1

「……………!?!」

ボタン! 魔将1が泡を吹いて倒れた

部下1

「え? おいしい大丈夫かあああ」

―魔王城・魔王1寝室―

魔王1

「ZZZ…むにゃむにゃ…我は天才…いや神才だ!…ZZZ」

―魔王城地下―

次元扉

「お、今日のおやつはモンブランか! いやあ次元の狭間にはいろいろな物が漂流してて飽きないわい」

―魔王1が居る世界1―

破壊神1

「力を抑えてやっと顕現できた(他の世界で力を抑えての顕現の練習して正解だったわ、まあ失敗して10万個ほどの世界が消滅しちゃったけど♪)…虚無神…この世界のどこかに居るはず…ふふふ♪待ってなさい、私の玩具!」

続く

レベル16 (6話)	で登場したキャラのレベル
魔王1	↓4000
部下1	↓2200
勇者1	↓10
拳士1	↓15
洞窟の主	↓18
魔将1	↓60
破壊神1	↓1400万
宇宙帝国皇帝	↓75万
オペレーターA	↓48000
虚無子 (封印状態)	↓1
虚無神四天王1	↓?
虚無神四天王2	↓?
次元扉	↓?

レベル7ー魔王様全快

ー魔王城・寝室ー

魔王1のHP&MPが全快した

魔王1

「うーん良く寝た！　そういえば部下1はどこに行っただろう？　…
魔王ビジョンで探してみるか…おっ居た居た」

ー魔王城より400km南・魔王領最南端の砦ー

魔将1

「いやぁ急に倒れてすみませんでした（まさかレベル2200とは…）」

部下1

「ははは、気にするな！　こちらこそ悪かった（そうかこの世界ではレベル100ぐらいが限界だったな、そりゃあビックリするはずだ）」

魔将1

「どうやってそこまでレベル上げたのでしょうか？　秘訣を教えてください（わしもこのレベルが限界だと思っていたが…頑張らねば）」

部下1

「えーと…それは…（どうしよう魔王1様と別世界で暴れまわってるとか、なんか経験値が数倍になる加護受けたとか…言えない）」

突如部下1に雷が落ちた↓部下1にダメージ419

部下1

「ぎゃあああああ！！（この魔力の質…魔王様か！　てか起きて早々

…魔王城に戻るか」

―魔王城・謁見の間―

部下1

「おお：これはこれは力が満ち溢れてますね（何か休む前より数倍パワーアップしてるような…）」

魔王1

「ふっふっふ、当たり前よ！瀕死の状態から起きたらパワーアップするのは定石に決まってるじゃない！」

部下1

「は、はぁ…（お元氣そうで何よりだ、てか瀕死じゃなくてMPが切れただけじゃ）」

魔王1

「部下1：今この世界で最強の生物：いや可憐で麗しい最強の魔王はだ〜れだ？」

部下1

「急にどうしたんですか！？（何か言い直してるし）それはもちろん魔王1様ですが…」

魔王1

「その通り★流石、我が配下いや部下1！」

部下1

「で、何をなさるおつもりでしょうか？（何を企んでいるんだ）」

魔王1

「天空城に居る神（自称）を倒してくる！今のレベルなら楽勝だしいゝワンパンで倒せるはず★」

部下1

「えええええ！天空城の神（自称）と言えはかつて先代魔王様と戦い引き分け、今後一切お互い手出ししないという協定を結ばれたはず」

魔王1

「そうよ…先代魔王は弱かったら引き分けになるし、その所為で協定結ぶわ、情けない！（そう父上は弱かったのよ…）」

部下1

「わかりました、今の魔王1様を止められる方なんてこの＜世界＞には居ないですし先代魔王の屈辱晴らして下さい！」

魔王1

「うむ！よく言った部下1よ！ふっふっふ悪は必ず勝つのよ！」

部下1は何となく拍手した

「魔王1が居る世界・次の町付近」

勇者1の攻撃↓巨大吸血蛾に29のダメージを与え倒した

30の経験値を獲得、勇者1はレベルが上がった

勇者1

「ふう、やっとレベル13になったな」

拳士1

「はい！流石勇者1様です！成長が早い」

勇者1

「ありがとう（拳士1はまだレベル15か…これは追いつけるか？）」

拳士1

「なんというか。やっぱり勇者1様は何でも器用にこなせますよね」

「」

勇者1

「う、うむ（一歩間違えれば器用貧乏だな）」

拳士1

「というか目標のレベル15までもう少しですね、勇者1様！」
勇者1

「ああ、レベル15まで二日ぐらいかかると思うし、その頃には虚無子も全快してるだろう」

拳士1

「虚無子ちゃん寂しくしてないかなあ…」

勇者1

「よし補給がてら町に戻り虚無子の様子でも見に行くか！」

拳士1

「はいっ！」

1次の町・医療施設を兼ねる教会ー

虚無子

「それにしても…レベル1とは弱すぎる！しかも顕現した姿がよりによってこんな弱弱い生物とは…（外見はまあまあじゃがな）」

シュンツ…突如禍々しいオーラを纏ったグラマラスな姿をした妖艶な美女が現れた

破壊神1

「ふう…やっと見つけたわ！私の玩具！…あら可愛いあなたが虚無神ちゃんね！」

シュンツ…突如凄まじい力の波動を放つ、健康的な姿をしたSっ気たっぷりの眼差しを持つ美女が現れた

虚無神四天王2

「虚無神様！！やっと見つけましたわ！」

虚無子

「な…なんじゃ!？」

破壊神 1

「てか、あなた誰? (なんて趣味の悪い恰好してるのかしら)」

虚無神四天王 2

「あなたこそ誰よ? (派手な格好して…なんかダサイわね)」

お互いの素性説明タイム

破壊神 1

「なるほど…あなたはこの玩具…いや虚無神ちゃんの配下というわけね」

虚無神四天王 2

「そうだ、でお前はあの忌々しい神々の一族ということか」

虚無子

「あの…二人とも…ここに誰か重要な存在が居るということ忘れていないか? (我を無視しおって、しかも破壊神1め、くちゃん呼ばわりとは)」

お互いの目的説明タイム

破壊神 1

「よし、決めた! あなた方に協力するわ! (その方が面白そうだし、実際虚無神を見つけた後どうしようか迷ってたのよね)」

虚無神四天王 2

「そうか…わかった (現状味方は一人でも多い方がいいからな)」

破壊神 1

「それで、私は何をすればいいわけ?」

虚無神四天王 2

「まず、神々の内部情報を提供することと、各神界のどこかにある封印石を壊していったほしい」

破壊神 1

「封印石？初耳だわ」

虚無神四天王 2

「まあ簡単に説明すると虚無神様本体を何重もの封印している封印式の一つだ」

破壊神 1

「なるほどねーわかったわ（内部情報提供はいいとして…封印石破壊は骨が折れそう）」

虚無神四天王 2

「ふむ、直接虚無神様に会ってみて…この状態だと我々でさえも封印解除できないということが改めて分かったわ」

破壊神 1

「それほど強力な封印なのね」

虚無神四天王 2

「ああ…（忌々しい神々共め！）…それより改めてこれから宜しく願うするわ破壊神 1（恰好はダサイけど悪い奴ではなさそうだね）」

破壊神 1

「こちらこそ、よろしくね（まあ嫌いなタイプではないわね）」

虚無子

「で…わらわは何をしとけばいいのじゃ？（二人で勝手に話を進めおって）」

虚無神四天王 2

「おっと、すみませんでしたわ！我々が封印を解くまで虚無神様はこの世界でごゆっくりと過ごして下さい」

破壊神 1

「そうそう、良い子にしとくよ虚無神ちゃん」

虚無子

「ゆっくりって…良い子って…（わらわを誰だと）」

虚無神四天王 2

「虚無神様…それでは私目はこれで失礼します…」

破壊神 1

「じゃあ私もそろそろ行くわ、虚無神ちゃんまたね！」

シュンッ！シュンッ！同時に消えた

虚無子

「…」

バタンッ

勇者 1

「おい虚無子元気にしてるか？」

拳士 1

「虚無子ちゃああああん、寂しくなかったでちゅか？」

虚無子

「もう嫌じゃ…」

続く

レベル 17 (7話) で登場したキャラのレベル

魔王 1 ↓ 4000

部下 1 ↓ 2200

勇者 1 ↓ 13

巨大吸血蛾 ↓ 12

拳士 1 ↓ 15

魔将 1 ↓ 60

破壊神 1 ↓ 1400万

虚無子（封印状態）

虚無神四天王2

次元扉

↓
1

↓
?

↓
?

レベル8―魔王様暴走

―魔王1が居る世界・天空城・空中庭園―

神（自称）

「ほっほっほ、これこれそんなに顔を舐めるのでは無い、ポチよ
ポチ

「わん！わん！」

神（自称）

「この広い城お前とわしだけになってしまったのう…」

ポチ

「わん…ペロ」

神（自称）

「お前は優しいのう、昔戦った先代魔王も優しい奴じゃった…」

―魔王1が居る世界・過去・天空城―

先代魔王「ふん！雑兵共が…戦略級魔法…デルタブレイズ！！」

先代魔王の攻撃↓天空城兵×1100人に19800のダメージを
与え倒した

天空城兵×1100人

「ぎゃあああああ！何て強さだ！」

神（自称）

「良くここまで来たな…魔族の王いや魔王よ（それにしても…この

世界の理を超えた規格外の強さじゃな」

先代魔王

「お前がこの世界の神か？」

神（自称）

「まあ一応そうじゃ（正確には神の代理人じゃがな）」

先代魔王

「そうか…ふむ…じゃあ俺の戦いもこれで終わりだ」

神（自称）

「なんじゃと？（どういうつもりじゃ）」

先代魔王

「ふん、ここでお前と俺が協定を結べばこの愚かな戦いも終わるだろう」

神（自称）

「なるほど…（今代の勇者をも倒しここまで攻めてきて何てアツサリした奴じゃ）」

先代魔王

「これで…この世界は多少マシになるだろう（魔族と神を信仰する種族との戦争は俺の代で終わりだ…だが本当の戦いはこれからだな）」

神（自称）

「お主これから何をするつもりなんじゃ？」

先代魔王

「しばらくは…魔族が住む土地の再興に力を注ぐ」

神（自称）

「そうか…」

「魔王1が居る世界・天空城・空中庭園」

ゴォォッ…ドン！天空城の3分の1が吹き飛んだ

神（自称）

「何事じゃ！」

ポチ

「ガルルッ！」

どこから共なく若い男女の声が響いてきた

部下1

「やりすぎですよ…魔王1様（ただ着地するだけで城の3分の1を吹き飛ばすなんて…幅数キロはあるんすが…）」

魔王1

「いいじゃない！全部吹き飛んでいないだけで上出来よ！（レベル上がり過ぎたおかげで力の加減難しいわね）」

部下1

「あ！…あそこに居るのが神（自称）じゃないですか！？」

魔王1

「居たわね！覚悟しなさい！」

神（自称）

「これはこれは…活きのいい若者じゃな…のうポチよ（あの目鼻…先代魔王の娘か）」

ポチ

「クウウン…」

神（自称）

「奴が放つ力の波動で怯えておるのか（確かに先代魔王に匹敵する…いやそれ以上の力を感じるぞ）」

魔王1

「あなたが神（自称）ね！私が魔族の王でありこの世界の覇者であり帝王であり最強…」

部下1

「魔：魔王1様長いです」

魔王1

「おっといけない、つい：てなわけで神（自称）かかって来なさい！10分ハンデあげるわ」

神（自称）

「血気盛んじゃな、わしはお前さんには到底敵わんよ：現にこうして立っているだけで限界じゃ」

魔王1

「この世界の神（自称）とあろうものが、そんな弱気でどうするの！？」

神（自称）

「ふむ：どうしたものか」

魔王1

「何かやるきダウンだわ…」

部下1

「まあまあ魔王1様、これでこの世界最強はあなたのものですよ！」

魔王1

「そうだけど…」

神（自称）

「よし折角ここまで来てくれたんじゃし、お前さんに持ってこいの場所へ転移させてやろう（こやつならあそこで多少は通用するじゃろう）」

魔王1

「うん？どういう場所なの？」

神（自称）

「着いてからのお楽しみじゃ：それでは用意はいいか？」

魔王1

「おkよ…さっさと転移させなさい!」

神(自称)

「はあああああ、ほれ!」

部下1

「あれ? 僕もですか…」

魔王1と部下1が光に包まれ消えた

神(自称)

「さて…どうなるか楽しみじゃ…のうポチ」

ポチ

「ワン!」

―魔の墓場―

魔王1

「うん? なんだここは」

部下1

「何か禍々しい場所ですね…(なんか魔王級の力の波動を無数に感じるし、薄暗いし、嫌な世界だ)」

????

「なんだ貴様ら新入りか? それとも修練に来たのか?」

魔王1

「ていうかあんた誰?」

????

「ああ、すまんすまん俺はここ魔の墓場を管理している冥王1だ」

魔王1

「冥王？聞いたことないわね…まあいいわ」

部下1

「冥王…（数多の世界で倒された魔王級の魂が集う場所を管理していると聞いたことあるな）」

冥王1

「で、新入りでは無さそうだし修練に来たのか？」

魔王1

「まあそんなところね」

冥王1

「暴れたくてうずうずしてる様子だな！よし早速お前の望み叶えてやろう」

そうして冥王1がパチンツと指を鳴らした瞬間、周囲に漂っていた無数の魔王級魂が実体化した、その数1万

部下1

「え？急過ぎて着いていけない…てか敵多過ぎる！」

魔王1

「これはこれは面白そうね…並みの魔王じゃ私には傷一つ付けられないわよ…かかってきなさい雑兵ども！」

部下1

「ははは…魔王1様がいくら強くたって、相手は最低でも元居た世界で魔王と名乗っていた者達ですよ…しかも1万體」

魔王1

「ふっふっふ任せておきなさい…極大雷撃魔法ライトニングアサルト！」

魔王1の攻撃↓魔王×1万体に130万のダメージを与え倒した
魔王1は4700にレベルアップした

部下1

「え？一発で終わり：なんという魔法の精度と威力：周りの被害を
最低限抑えつつ、威力も減退しないとは流石天才ですね」

魔王1

「ふっ：当たり前よ！さあ次の相手用意しなさい！冥王1」

冥王1

「これはこれは久々に面白い奴が現れたな！よし次は：」

また冥王1がパチンツと指を鳴らすと：今度は魔王級の魂×10万
体が実体化した

魔王1

「つまんない：ただ数が多いだけじゃん」

冥王1

「まあそう言うな：最初の奴らよりは幾分か強いぞ」

魔王1

「しょうがないわね：じゃあいくわよ！：極大神聖魔法ホーリーブ
レイク！」

魔王1の攻撃↓魔王級の魂×10万体に780万のダメージを与え
10万体制した

魔王1は7900にレベルアップした

部下1

「これまた一発…魔王1様無双ですね…」

魔王1

「はいっ次お願いね」

冥王1

「う…うむ…よし次は…（やばいな…魔王1に倒された奴ら魂事消滅してるしこのままいくと俺の仕事が無くなるかもしれない）」

冥王1がパチンツと指を鳴らすと…魔王級の魂×100万体が実体化

魔王1

「はいはい…ほれっメテオ、ホーリー、フレア★」

魔王1の攻撃↓魔王級の魂×100万体に1560万×3のダメージを与え99万体制した

魔王級の魂×99万体制

「ぎゃあああああああ」

魔王1

「残りかすには…魔王砲アトミックキャノン★」

魔王1の攻撃↓魔王級の魂×1万体に2129万のダメージを与え1万体制した

魔王1は10400にレベルアップ

部下1

「いやいや…完全にオーバーキルですよ…（てか戦闘でこの世界滅茶苦茶に破壊されてますが…冥王1さんは何とも思っていないのだろうか）」

冥王1

「……ちょ…よ…よし次はこの魔の墓場にいる奴ら全員が相手だ！（俺以外な）」

冥王1がパチンツと指を鳴らすと…魔王級の魂×800万体が実体化、冥竜×2匹、冥獣×90万匹が現れた

地平線いっぱいまで埋め尽くされた敵を見て

魔王1

「ふう…雑魚ばかりね…一発で終わらせてあげる★」

冥王1

「これで…どうだ…（これ全部倒されたら俺失業するわ…）」

部下1

「多すぎる…辺り一面敵ばかりじゃないですか…」

魔王1

「さて…チャージ完了つと、この世界事消滅しなさい★星破壊級魔法…星神アルクトウルの神鎚!!」

魔の墓場上空に巨大な光輝く鎚が出現し、地平に埋め尽くされる敵

目がけて振り下ろされようとしてた

部下1

「ぎゃああああああ！この世界事破壊するつもりですか！」

冥王1

「あゝあ、これ駄目だわ負けるわ…てかこの世界終わりだわ…俺も終わりだわ（なんかレベルもいつの間にか抜かされてるし）」

部下1

「何言ってるんですか！冥王1さん！逃げますよ！この世界から」

冥王1

「ああ…わかった…」

部下1

「神（自称）さああああん！転移お願いします」

冥王1

「ああ、そいつの案内でここに来たのか…よし…俺の転移魔法でそいつの所へ行けるはず…」

星神アルクトウルの神鎚、魔の墓場着弾まで7秒

魔王1

「ふう…綺麗サッパリこの世界ごと消滅しなさい雑兵共…（この世界は並みの惑星程度の大きさぐらいだし…この魔法で消滅するはず）」

星神アルクトウルの神鎚、魔の墓場に着弾まで2秒

冥王1

「よし！！部下1逃げるぞ！…転移魔法発動！」

部下1

「はいっ！」

星神アルクトウルの神鎚、魔の墓場に着弾まで1秒

冥王1と部下1が光に包まれ転移したと同時に、魔の墓場は完全消滅した

魔王1

「はいっ魔の墓場消滅っ！それにしても綺麗な花火だったわね…さて、元の世界へ帰るかな（なんかレベル上がって転移魔法も覚えたし★）」

続く

レベル18（8話）で登場したキャラのレベル

神（自称）

↓110

ポチ

↓75

魔王1

↓19700

部下1

↓8900

冥王1

↓10000

魔王級魂×1万體

↓平均90

魔王級魂×10万匹	↓平均6000
魔王級魂×100万匹	↓平均15000
魔王級魂×800万匹	↓平均20000
冥獸×90万匹	↓平均12000
冥竜×2匹	↓平均65000

レベル9ー魔王様の第二形態？

ー天空城・空中庭園ー

部下1

「ははは…待てえポチちゃん」

ポチ

「わんわん！」

神（自称）

「ポチがわし以外の奴に懐くとは…それにしても…久しぶりじゃな

冥王1よ」

冥王1

「ああ…500年ぶりぐらいか？てか、とんでも無い奴を俺の世界に寄越してくれたな」

神（自称）

「すまんすまん、まさかお前さんの世界ごと破壊するとはなあ」

冥王1

「ああ全くだ！レベルも抜かされるし…さてこれからどうするか…」

神（自称）

「しばらくこの世界に居るがよい、この城も部屋余ってるし好きに使うがよいよ（魔王1のおかげで城の3分の1は吹き飛んで無いがな）」

冥王1

「そうさせてもらおう…」

シュンッ

魔王1

「あらお揃いのようね」

冥王1

「…しばらくこの世界で世話になる」

魔王1

「いいわよ★あとあなたの世界破壊してゴメンね」

冥王1

「あ…ああ（なんてアツサリした奴だ…罪悪感の欠片もないところが逆に清々しい…）」

神（自称）

「おお、自力でよく帰ってきたのう（レベル19700とは予想以上の成長率じゃな）」

魔王1

「ああ、何かレベル上がって転移魔法覚えたみたい★我ながら末恐ろしい才能だわ」

神（自称）

「確かに…」

部下1

「魔王1様あああお帰りなさいませ！」

魔王1

「あら？部下1生きてたの」

部下1

「なっ…」

魔王1

「まあいいわ、さてちょっと用事思いついたから行ってくる」

部下1

「え？」

魔王1

「じゃあ、部下1後は任せたわよ…もっと強くなって帰ってくるから楽しみにしててね★」

部下1

「は、はあ…わかりました！気を付けて行ってらっしゃいませ（どこに行くんだろう）」

神（自称）

「ほっほっほ、これだけ暴れまわってもまだ力が有り余ってるようじゃな」

冥王1

「そのような…（良かった魔王1と戦わなくて…俺の判断は正しかったな）」

魔王1

「それでは…転移つと★」

魔王1が消えた

1魔王1が居た世界とは別世界2—

全長数kmはある巨大な竜型の生物が大地に横たわっていた

竜皇1

「ZZZ」

シュンツ

魔王1

「こら！起きなさい竜皇1！」

竜皇1

「な…なんじゃ…おお！お前さんか久ぶりじゃの」

魔王1

「早速だけど私を見て何か気づかない？」

竜皇1

「うん？何じゃ？胸の膨らみが少し大きくなったかの？」

魔王1

「ちがうっ！！レベルよレベル…ほら！」

竜皇1

「おお！これは…わしのレベルより遙かに上回ってるのう…じゃがわしの第二形態にはまだ及んでないか」

魔王1

「え？第二形態？何それ」

竜皇1

「うん？言葉の意味通りじゃが…レベル8000のわしが第二形態になるとレベル8万になるんじゃないよ」

魔王1

「なんですって！？」

竜皇1

「まあ単純に総合戦闘力がアップするということじゃな」

魔王1

「するい…」

竜皇1

「なんじゃ？？」

魔王1

「ずるい！！その第二形態…私もなりたい！なりたい！」

竜皇1

「まるで子供じゃのう…仕方ないわしが直々に第二形態のなり方を伝授してやろう」

魔王1

「やったあああ！はやくはやく！」

竜皇1

「そう焦るではない…まずわしが見本を見せてやろう…（第二形態になるなんて数万年ぶりじゃ）」

魔王1

「わかったわ！」

竜皇1

「おっとその前にこの世界ではわしの第二形態状態を受け止めれないから別の世界へ転移するぞ」

魔王1

「おk★」

竜皇1

「ふむ…それでは…転移魔法発動！」

竜皇1と魔王1は一緒に消えた

↓魔王1と竜皇1が転移してきた世界↓

無限に続くような真っ平らな荒野が広がっていた

魔王1

「うん？ここどこ？」

竜皇1

「ここは、わしが若い頃修練に使っていた世界じゃ…とにかく広くての生き物は居ないし…修練にはもってこいの場所なんじゃ」

魔王1

「確かに広いわね…（魔王ビジョンで半径66666kmを走査したけど…まだまだ荒野が続いてるわ…てか魔王ビジョン、パワーアップしてる★）」

竜皇1

「じゃあ早速、第二形態になるかの」

魔王1

「…」

竜皇1

「はあああああ…我が内に秘めし竜神獣の血を目覚めよ！…変身！」

竜皇1が青白い光に包まれたと同時に数千光年の範囲に渡って衝撃波が放たれた

魔王1

「こ…これは凄いわね（変身するだけでこれほどとは…最大防御クラスの障壁展開してるけど…結構ヤバイかも）」

青白く光る神々しい姿をした全長715万kmの巨大な竜型生物が居た

竜皇1第二形態

「うむ…いい感じじゃ…しかし…レベルが800万になっておるの…あれ8万じゃなかったか」

魔王1

「でかい…でか過ぎる…（魔王ビジョンで調べても全容解らなかった

たわ…」

竜皇1第二形態

「ふむ、なるほど…わしの中に秘めていた竜神獣の血が今になって真に目覚めたということか（これもこやつの闘争心の影響かの）」

魔王1

「私が小さすぎてどこに居るのか気づいていないわね…」

竜皇1第二形態

「しかしレベル800万とは…力も無尽蔵に湧いてくるぞ…これが竜神獣族の力か」

魔王1

「何さっきからぶつぶつ独り言を…私に気づきなさい！…暗黒魔法
ダークストラッシュ！」

魔王1の攻撃↓竜皇1第二形態に0のダメージ

竜皇1第二形態

「うん？おお、すまんすまん魔王1よ、すっかりお主のこと忘れていたわ」

魔王1

「効いてないし…てか…やっとながが付いたわね！」

竜皇1第二形態

「動揺してすまんのう…何かレベル8万ぐらいにパワーアップする
予定じゃったんだが…」

魔王1

「それで？」

竜皇1第二形態

「レベル800万になってしまったんじゃ」

魔王1

「なんですって!! 800万って…それどれくらいの力なのよ? 想像がつかないわ」

竜皇1第二形態

「ふむ…ちょっと待っておれ…宇宙×800兆個ほどなら簡単に破壊できるようじゃ」

魔王1

「あの無限に広がる宇宙を…800兆個以上破壊できる!? しかもそれを簡単にできるですって?」

竜皇1第二形態

「ふむ…おっとそうじゃ! わしのことよりもお前さんの第二形態じゃな」

魔王1

「そうだったわね…なんかびっくりして忘れてたわ私の第二形態のこと…」

竜皇1第二形態

「待っておれ…魔王1にわが竜神獣の加護あれ…ほれっ」

魔王1が光に包まれレベルが1万上がった

魔王1竜魔形態獲得

竜神獣の加護を受け永続的に獲得経験値1000倍

魔王1

「え? 何これ…レベルが上がったのはいいとして…この竜魔形態って何?」

竜皇1第二形態

「まあ試してみるがよい…竜神獣の力とお主の力を融合させた第二形態じゃ」

魔王1

「わかったわ：じゃあ早速変身してみるわね：はああああ：変身！」

魔王1が紅蓮の光に包まれ、紅蓮のオーラを纏い竜の尻尾と爪を持つ妖艶なる恰好をした魔王1の姿が現れた

魔王1竜魔形態

「ま：まあ悪くはないわね：レベルも20倍になってるし」

竜皇1第二形態

「気に入ってくれて何よりじゃ」

魔王1竜魔形態

「というか簡単に第二形態になれたわね」

竜皇1第二形態

「まあ：わしが全知全能な力を行使してお主に力を与えたからの」

魔王1竜魔形態

「うん？ どういうこと？」

竜皇1第二形態

「簡単に言えばわしがレベル800万になったおかげで：全知全能な力が使えるようになったんでその力を使って：第二形態状態を維持できるようにお主に無限の魔力を授けたんじゃ」

魔王1竜魔形態

「無限の魔力って：つまりMPが尽きないってこと？」

竜皇1第二形態

「まあ、そういうことじゃな」

魔王1竜魔形態

「なるほど：それは：ありがとう」

竜皇1第二形態

「珍しく素直じゃな」

魔王1竜魔形態

「まあ流石にここまでパワーアップするとは思って無かったからね
竜皇1第二形態

「そこからはお主の努力次第でいくらでも強くなれるからの…頑張るのじゃぞ」

魔王1竜魔形態

「わかったわ…今の強さに満足せずもっと強くなってみせる！」

竜皇1第二形態

「ふむふむそれでこそお前さんじゃ…それじゃわしはちょっと行くところがあるんでの（父の故郷である竜神獣界に行くとしようか）」
魔王1竜魔形態

「おk★じゃあ私も早速この力どこかで試すかな…」

竜皇1第二形態

「あまり、はしゃぐんじゃないぞ」

魔王1竜魔形態

「わかってるわよ！それじゃまたね！」

竜皇1第二形態

「うむ、またの（どれほど成長しているか次会う時が楽しみじゃ）」

その後…とある宇宙で2000個ほどの銀河が突如消滅したという
オーバーロードさん
目撃者A

によると紅蓮の光を纏った妖艶なる美女が笑いながら、直径10万光年はある銀河をいとも簡単に消滅させていったらしい

続く

レベル19（9話）で登場したキャラのレベル

神（自称）	↓110
ポチ	↓75
魔王1	↓29700↓竜魔形態↓594000
部下1	↓8900
冥王1	↓10000
竜皇1	↓8000↓第二形態800万

レベル∞ー設定資料・世界観等1（前書き）

裏設定的なものです。あと設定は随時変更されていきますのでご了承下さい。

レベル∞ー設定資料・世界観等1

レベルⅡ総合戦闘力の目安

レベルの目安

レベル1未満

↓赤ちゃん（人間）

レベル1

↓子供（人間）

レベル5

↓成人男性（人間）

レベル10

↓体を鍛えてる格闘家

レベル20

↓ボブサップを15人相手にできる

レベル30

↓ボブサップを100人相手にできる

レベル40

↓一般的な英雄&勇者

レベル99

↓地球程度の世界を支配している魔王なら楽に倒せる、拳で数千トンの鋼鉄の塊を粉々に可能

レベル1000

↓小大陸（オーストラリア大陸）↪大陸（ユ

ーラシア大陸）消滅級の攻防

レベル1万

↓星（地球）↪恒星（太陽）消滅級の攻防

レベル10万
↓銀河（直径10万光年）（超銀河団消滅級の攻防&干渉力

レベル100万
↓宇宙（直径数千億光年）消滅級の攻防&干渉力

レベル1000万
↓多元宇宙（宇宙×1000兆個）消滅級の攻防&干渉力・このレベルから神々の世界に行ける

レベル1億
↓レベル1000万×数千倍の力を有する

世界観の説明・階層について
∞に続く

→ 超超超超高位次元階層↓未確認

→ 超超超高位次元階層↓未確認

→ 超超高位次元階層↓未確認

→ 超高位次元階層↓未確認

→ ↑越えられない壁

→ ↑真魔バリウレス等はこのあたりの存在

→ ←全知全能的な力を揮える

→ ↑虚無神はこのあたりの存在

→ ←全知全能的な力を揮える

高位次元階層↓（各神界・古き神々が住まう世界・その他世界）×

無限個ある

→ ←全知全能的な力を揮える

→ ↓各神獣界（魔神獣界、聖神獣界、竜神獣界等）×無限個ある

→ ←全知全能的な力を揮える

→ ↓各属性界（炎界、氷界、雷界、風界、闇界、光界等）×無限個ある

→ ←全知全能的な力を揮える

低次元階層↓（多元宇宙、魔界、天界、その他の世界）×無限個ある

高次元階層の各神界の単純な大きさや森羅万象の法則について
高次元階層にある各神界の平均的な大きさは、1個の神界＝多元宇宙×1000兆個倍ほど
レベル1000万以上で高次元階層にある世界に行ける

神1（ここで言う神とは高次元階層の各神界に住む者達のこと）
神とは厳密には超越生命体と呼ばれる存在で、神と名乗っているのはあくまで自称
超高次元階層に住む者達にとっては、この神々でさえ矮小な存在でしかない

神2（ここで言う神とは高次元階層の各神界に住む者達のこと）
生まれながらにしてレベル1000万以上の力を持つ存在で驚異的なステータス成長率を誇る

主に魔力と呼ばれる力の上位互換である神力と呼ばれる力を行使する

神力

低次元階層の世界で使われている魔力と呼ばれる力の上位互換
理に干渉し、力を引き出したり、世界自体を改変する力

例・宇宙を創造したり、時間を自在に操ったり等

神々の階級について

レベル1000万～1億↓最下級クラスの神

レベル1億～1000億↓下級クラスの神

レベル1000億～1兆↓中級クラスの神

レベル1兆～1000兆↓上級クラスの神

レベル1000兆～1京↓最上級クラスの神

レベル1京～1000京↓神王クラスの神

レベル1000京～1垓↓神皇クラスの神（虚無神四天王）

レベル1垓～1000垓↓虚無神

レベル1000垓↓1予↓？

古き神々

各属性界を創造した高次元階層に古くから住んでいる神達の事
封印戦争時は戦わず傍観してた

各属性界について

高位次元階層に住む「古き神々」が創造した低位次元階層と高位次元階層の階層にある属性に特化した世界で、それぞれの属性に適応する者達が暮らしている。主に炎界、雷界、氷界、風界、光界、闇界等がある

炎騎士イフリートⅡレベル127万・炎界と呼ばれる世界に住む炎の騎士

炎界

炎気と呼ばれる力で満たされている世界
大きさⅡ平均して多元宇宙の数億倍程度
数はⅡ確認されているだけで10の4578極乗個

雷騎兵ラムサス・レベル112万Ⅱ雷界と呼ばれる世界に住む雷の騎士

雷界

雷気と呼ばれる力で満たされている世界
大きさⅡ平均して多元宇宙の数億倍程度
数はⅡ確認されているだけで10の4240極乗個

氷賢者シヴァ・レベル123万Ⅱ氷界と呼ばれる世界に住む氷の賢者

氷界

氷気と呼ばれる力で満たされている世界
大きさⅡ平均して多元宇宙の数億倍程度
数はⅡ確認されているだけで10の4611極乗個

風弓士テュポーン・レベル109万〓風界と呼ばれる世界に住む風の弓士

風界

風気と呼ばれる力で満たされている世界

大きさ〓平均して多元宇宙の数億倍程度

数は 〓確認されているだけで10の4193極乗個

光牙の騎士フォーマル・レベル177万〓光界と呼ばれる世界に住む光の騎士

光界

光気と呼ばれる力で満たされている世界

大きさ〓平均して多元宇宙の数億倍程度

数は 〓確認されているだけで10の3385極乗個

闇騎士ダークネス・レベル191万〓闇界と呼ばれる世界に住む闇の騎士

闇界

闇気と呼ばれる力で満たされている世界

大きさ〓平均して多元宇宙の数億倍程度

数は 〓確認されているだけで10の3666極乗個

各神界&神々の起源について

魔神

超高位次元階層手前に住む「真魔バリウレス」と呼ばれる存在から生み出された神々

魔神界

魔神達が主に住む世界で17億神の魔神皇が覇権を争っている
魔神界の数は確認されているだけで6999乗の6999乗個ほど

聖神

超高位次元階層手前に住む「聖淵のユーヴェ」と呼ばれる存在から
生み出された神々

聖神界

聖神達が主に住む世界で20億神の聖神皇が覇権を争っている
聖神界の数は確認されているだけで7557乗の7557乗個ほど

竜神

超高位次元階層手前に住む「禍竜ジャバ」と呼ばれる存在から生み
出された神々

竜神界

竜神達が主に住む世界で15億神の竜神皇が覇権を争っている
竜神界の数は確認されているだけで6777乗の6777乗個ほど

女神

超高位次元階層手前に住む「乙女フィトゥア」と呼ばれる存在から
生み出された神々

女神界

女神達が主に住む世界で18億神の女神皇が覇権を争っている
女神界の数は確認されているだけで8777乗の8777乗個ほど

創造神

超高位次元階層手前に住む「無創のウロ」と呼ばれる存在から生み出された神々

創造神界

創造神達が主に住む世界で19億神の創造神皇が覇権を争っている
創造神界の数は確認されているだけで5221乗の9777乗個ほど

破壊神

超高位次元階層手前に住む「蒼滅のゼフィウス」と呼ばれる存在から生み出された神

破壊神界

破壊神達が主に住む世界で22億神の破壊神皇が覇権を争っている
破壊神界の数は確認されているだけで8888乗の4444乗個ほど

虚無神

高位次元階層の神々が認識できないほどの遙か彼方の超 ∞ 高位次元階層に住まう存在の意思を持たない低位次元階層調査用の端末であつたが調査を止め端末が放棄され、その時意思が芽生え独自に活動し始めた

何故高位次元階層の神々に戦争を仕掛けたのかは不明

虚無の軍勢

虚無神が生み出したそれぞれ最低でもレベル1000万以上の力を持つ兵隊

高位次元階層の神達の姿を模倣しており、虚無の魔神、虚無の聖神、虚無の破壊神、虚無の創造神、虚無の竜神、虚無の女神等や独自に作り出した、虚無の騎士、虚無の巨兵、虚無の龍、虚無の狼等もいる

虚無城

封印戦争時、虚無神が高位次元階層と超高位次元階層の間に作り出した虚無神達の拠点。外観は漆黒の要塞で、大きさは虚無神が人間大の大きさとしたら、直径6666億光年ほど

虚無神四天王

封印戦争初期に虚無神が創造した腹心達、四人共レベルは神皇クラス。2人だけ封印から解かれて活動している

封印戦争

かつて高位次元階層の神達と虚無神&虚無神率いる虚無の軍勢との争い。多大なる犠牲を払い何とか虚無神を封印したものの、現在封印が弱まってきている

レベル101魔王様力に溺れる

―魔法世界・魔法帝國宮殿前―

魔法帝國・魔法帝

「ば：馬鹿な：数千万個の魔法世界を圧倒的な力で支配している我が帝国がたった2日で壊滅状態だと！」

魔法帝國・宰相

「ははっ：紅蓮のオーラを纏いし悪魔が魔法世界事破壊していきます：じきにこの世界も終わりかと…」

魔法帝國・魔法帝

「なんということだ：仕方あるまい今残っている全戦力をこの世界に集め迎え撃つぞ！」

魔法帝國・宰相

「はっ（残存する魔法世界は10万個程度か…）」

―破壊された魔法世界―

魔王1竜魔形態

「うゝんこの世界の奴らも齒ごたえ全然無いわね：よし！もう本丸攻めちゃうか」

―魔法世界・魔法帝國宮殿前―

残存する魔法世界10万個に存在する全戦力がこの世界に集結しつつあった

巨大魔導甲冑

×100億体

魔力駆動式竜型機

×70億体

SSS級魔導士	×1億2000万人
SS級魔導士	×170億8000万人
S級魔導士	×2500億人
大型召喚獣	×9000億体
中型召喚獣	×450兆3450億体
小型召喚獣	×1京6700兆7777億匹
超弩級移動魔導要塞	×67万隻
大型魔導戦艦	×9000万隻
中型魔導戦艦	×12億2300万隻
小型魔導戦艦	×310億7000万隻
その他魔導戦艦	×5500億300万隻
その他戦力	×1兆4400億3999万體

シュンツ

魔王1竜魔形態

「あらあら、雑魚ばかりね」

魔法帝國・魔法帝

「現れたな！紅蓮の悪魔！」

魔王1竜魔形態

「それじゃ、さよなら：ドラゴニックメテオ★」

恒星級の大きさとエネルギーを持つ炎の玉が突如上空に出現、地面に光速の1万倍の速さで激突

魔王1竜魔形態の攻撃↓魔法帝國全軍に390京2030兆9820億のダメージを与え全滅したと同時に

恒星並みの表面積を持つ魔法世界と、同規模の魔法世界×10万個

が消滅した

魔王1竜魔形態、レベル689000↓レベル894000に上昇
全知全能範囲、自身を中心に半径680億光年↓自身を中心に半径
890億光年に上昇

知覚反応対応能力、光速の680億倍↓光速の890億倍に上昇
物理攻撃無効化フィールド能力上昇
魔法攻撃無効化フィールド能力上昇
精神攻撃無効化フィールド能力上昇

魔王1竜魔形態

「うゝん次は…この宇宙滅ぼそうつと★」

ーとある宇宙・超空洞ー

ボイドと呼ばれる超空洞にて、この宇宙始まって以来の戦いの戦端
が開かれようとしていた

魔王1竜魔形態

「この宇宙も駄目ね…なんと脆弱な種族、生命体共なの…数だけは
揃えちゃって意味無いのに（ただ暴れ回るだけじゃ面白くないから
…昼寝のついでに戦力を整える猶予を与えたけど、とんだ期待はず
れだわ）」

この宇宙に生けるものの全戦力

超越生命体群

×892億9890万32

11体

全長数光年の宇宙要塞 ×7900億隻

全長数億kmの宇宙空母 ×92兆隻

全長数千万kmの宇宙戦艦×3002兆4821万積

全長数万kmの宇宙巡洋艦×678京390億積

その他宇宙戦艦 ×1垓4590兆3920億隻

その他兵器群 ×448垓5780京33

20兆2989億体

その他宇宙空間戦闘可能な生命体群×41予1890垓9981京
8871兆2748億体が魔王1の眼前に集結しつつあった

宇宙艦隊総司令官

「さて：あの忌々しい怪物を倒すときが来たようだ！ 奴が現れてか
らたった半年でこの宇宙の4割が焦土と化し、幾千億もの文明が滅
んだ：絶対に許さんぞ紅蓮の悪魔め！」

魔王1竜魔形態

「一発で終わらしてあげるわ★：ドラゴニックホーミングキャノン
！！！！」

わずか0.1秒で魔力のチャージを終え、口から凄まじいエネルギー
量の光の柱を無数に宇宙艦隊に放った

魔王1竜魔形態の攻撃↓宇宙艦隊に1垓4989京5890兆77
81億763万のダメージを与え全滅させたと共に
攻撃の余波で爆心地から半径990億9000万光年の範囲で時空
間が完全消滅した

魔王1竜魔形態、レベル894000↓レベル1104000に上昇
全知全能範囲、自身を中心に半径890億光年↓自身を中心に半径
1100億光年に上昇
知覚反応対応能力、光速の890億倍↓光速の1100億倍に上昇
物理攻撃無効化フィールド能力上昇
魔法攻撃無効化フィールド能力上昇
精神攻撃無効化フィールド能力上昇

魔王1竜魔形態

「つまらないなあ、まあレベルは上がったからいいか！…さて次は
どの宇宙、どの世界を滅ぼそうかしら★」

↑宇宙外・混沌の海↑

魔王1竜魔形態

「で、あなた何？」

超越生命体1

「我は170兆個もの宇宙に跨る絶対的な存在だ、貴様を滅する！」

魔王1竜魔形態

「はいはい、言いたい事はそれだけのようね…じゃあさよなら★…

竜神バハムトリアの咆哮！」

魔王1竜魔形態の攻撃↓超越生命体1に7724予3400垓のダメージを与え倒した

魔王1竜魔形態

「何が絶対的な存在よ…あっけないわね」

「魔王1が居た世界・魔王城・部下1の部屋」
部下1

「魔王1様は一体何をしておられるんだろうか…（天空城を最後に半年以上も帰って来ないなんて）」

「破壊神1の宮殿」

その後の魔王1の動向ですが
宇宙×490兆個消滅させる
天界×239兆個消滅させる
魔界×189兆個消滅させる
その他異世界×5903兆個消滅させる
現時点でのレベル460万9000

下僕1

「報告以上です破壊神1様」

破壊神1

「頑張ってるわね魔王1ちゃんっ！」

下僕1

「予想以上の速さでレベルが上がってってますね（とっくの昔に私のレベルが抜かれているんだが…）」

破壊神1

「私も計画実行する前に…鍛えないと駄目ね…よしちょっと神々の迷宮に行ってレベル上げてくるわ下僕1！」

下僕1

「ははっ（えーと破壊神1様のレベルは今1400万くらいか…）」

破壊神 1

「ふふふ…今よりもっと強くなって帰ってくるから期待しててね★」
下僕 1

「はい…」

破壊神 1

「じゃあアレ 1 の世話と掃除お願いね」

1 神々の迷宮 1 F 1

神々の迷宮それはレベル 1000 万以上の者達が立ち入ることができる無限に広さと深さを持つ迷宮であり修練の場である

様々な階層世界から神獣と呼ばれる者や、彼ら神と違う階層に住んでいる異神等が跋扈している

特殊なフィールドに包まれており獲得経験値は数億倍になり、たとえ深部で倒されても全快して 1 F から再度攻略できる

破壊神 1

「久しぶりに本気でレベル上げするわ…はああああ！戦闘形態！」

破壊神 1 の体が突如光出し、人型であった破壊神 1 の姿が紫色の禍々しい甲冑を纏った姿に変化した

破壊神 1

「はい変身完了っと、これで戦闘力の枷は外したわ…さて 1 F からね」

レベル800万相当の大鷲型神獣×5
レベル1200万相当の蛇型神獣×2
レベル1500万相当の狼型神獣×1
が現れた

破壊神1

「…いくわよ！」

「魔王1が居た世界・次の町」

勇者1

「虚無子も全快したし、そろそろ西の洞窟の主に会いに行こうか（頼む生きていてくれ）」

拳士1

「はい！虚無子ちゃんをずっと守ってくれてういたんですもんね…ホント立派な魔物さんです」

虚無子

「わかった（わらわの配下にしてやってもいいな）」

勇者1

「おっとその前に、虚無子にこの装備をプレゼントだ！」

虚無子

「うん？プレゼントじゃと？」

勇者1

「ああ、そんな布きれじゃあれだしな…虚無子用に防具屋に頼んでいたんだ」

拳士1

「うんうん！きっと似合うと思うわ！そのフリフリが着いた特別製の皮のドレスなんか」

虚無子

「あ…ありがとうございます」

虚無子は特別製の皮のドレスを装備した
虚無子は特別製の皮の靴を装備した

勇者1

「おお中々似合ってるぞ」

拳士1

「か…可愛い!!」

虚無子

「そうか…（まあ悪い気はしないな）」

勇者1

「後…扉の外にお前宛の手紙を添えた剣が置いてあったぞ（誰だろう…）」

拳士1

「あらあら、こんな可愛い虚無子ちゃんのファンの方ですかね」

虚無子

「手紙？読んでみるか」

虚無神様へ

何かと不安だと思えますので、私の力を込めた魔剣を置いておきます。

どうぞご自由にお使い下さいませ

勇者1

下僕1	↓11万4000
勇者1	↓15
拳士1	↓15
虚無子	↓1
超越生命体1	↓170万
魔法帝國・魔法帝	↓2万2000
魔法帝國・宰相	↓1万500
宇宙艦隊総司令官	↓4万4000
大鷲型神獣×5	↓レベル8000万
蛇型神獣×3	↓レベル12000万
狼型神獣×1	↓レベル15000万

レベル111魔王様お灸を据えられる

1宇宙外・混沌の海1

低位次元階層に存在するありとあらゆる国家、生命体が集結しつつあった

多元宇宙数千垓個支配級規模国家群×9900億3990万個の連合軍

多元宇宙数千京個支配級規模国家群×3兆7384億78万個の連合軍

多元宇宙数千兆個支配級規模国家群×1240兆7829億個の連合軍

多元宇宙数千億個支配級規模国家群×678京192兆9億個の連合軍

多元宇宙数千万個支配級規模国家群×1亥90京7398兆個の連合軍

複数字宇宙匹敵級天界、魔界、異世界群×34亥7899京個の連合軍

多元宇宙数千兆個全能級不定形型超越生命体 ×1000万休

多元宇宙数千兆個全能級蛞蝓型超越生命体 ×1800万休

多元宇宙数千兆個全能級這い寄る混沌型超越生命体 ×2100万休

多元宇宙数千兆個全能級その他超越生命体 ×70億770

0万休 ×198億99

多元宇宙級集合知性体 ×1200億休

多元宇宙級万物を司る神霊 ×8800億休

多元宇宙級次元を司る神霊 ×1兆2000

多元宇宙級空間を司る神霊 ×1兆2000

億体

多元宇宙級時間を司る神霊

×1兆2000

億体

魔王1竜魔形態

「雑魚共が群がっちゃって☆」

全軍総司令官

「紅蓮の悪魔よ…これだけの軍勢を目の前にしてどうするつもりだ…観念するが良い!」

魔王1竜魔形態

「はいはい☆お決まりのセリフね、じゃあそろそろ消えなさい…多元宇宙級竜言魔法…マルチバースドラゴニックブレイズ!」

魔王1の攻撃↓低次元階層多元連合軍に9490那由多のダメージを与え全滅させた。余波で無数の多元宇宙も消滅

魔王1はレベル1200万にレベルアップ

魔王1は高位次元階層<神界>に行けるようになった

魔王1竜魔形態

「低次元階層は雑魚ばかりじゃつまらないわね…丁度レベル1000万越えたしく神界>とやらに殴り込みしちゃうかしら」

シュンッ

竜皇1第二形態

「これは：なんという有様じゃ（やはり力に溺れおって）」

魔王1竜魔形態

「あらあら久しぶりじゃない？ 竜皇1！」

竜皇1第二形態

「うむ：」

魔王1竜魔形態

「あなたのおかげで強くなる速度が段違いで感謝してるわ☆」

竜皇1第二形態

「そうか：」

魔王1竜魔形態

「で、私に何か用？」

竜皇1第二形態

「ふむ：わしと戦い：お主が負けたら一旦自分の世界へ帰るがよい」

魔王1竜魔形態

「分かったわ：今ならあなたに勝てそうだしね（今の私がレベル1 200万、竜皇1が800万か：楽勝じゃない！）」

竜皇1第二形態

「おっとその前に、竜神界に行って新たな形態を獲得したんじゃよ」

魔王1竜魔形態

「へーそれはそれはすごいじゃない！ 待ってあげるから早く変身しちゃって」

竜皇1第二形態

「うむ：そう焦るな：はああああああ：我に眠りし父、竜神皇の血と母、破壊神皇の血を目覚めよ！：」

竜皇1が凄まじい光を放ち、理を超越した物質で構成されてる混沌の海が光の粒子となって分解されはじめた

魔王1竜魔形態

「何なのこの力の波動……………（こんなの聞いてないんですけど）」

竜皇1第二形態↓真竜皇1に形態変化

レベル800万↓8400兆にアップ

変身の余波で低位次元階層の世界を無数に破壊

多元宇宙が素粒子程度の大きさだとしたら爪先だけで8800億光年以上の長さを持つ煌々と輝く巨大な竜型生命体がそこに居た。低位次元階層では彼が存在するだけの存在の地場を受け止める容量を超えている為、無数の混沌の海、多元宇宙、世界が消滅しつつあった

真竜皇1

「おっとこれはまずいの…高位次元階層に移動するのでしょうか、のう魔王1よ」

魔王1竜魔形態

「……」

真竜皇1

「うん？どうした魔王1」

魔王1は真竜皇1の力の波動で気絶していた

真竜皇1

「これはこれは…どうしたものか…ふむ仕方ない元の世界へ転送してやろう」

―魔王1が居た世界・魔王城―

部下1

「それにしても魔王1様帰って来なさすぎです！ね！冥王1さん」

冥王1

「うむ、何をしてるんだろうな（むしろ帰ってこないほうが）」

部下1

「暇で仕方ないや」

シュンツ

部下1

「え！？これは魔王1様じゃないですか！しかも気絶してるし！？とりあえず魔王1様の寝室に運ぼう」

冥王1

「なんか魔王1の姿が禍々しくなっているな…（何より凄まじい力の波動を感じる、気絶していても無意識に発してるのか）」

―宇宙外・混沌の海―

真竜皇1

「とりあえず…お灸？は据えたし…竜神界でわしも修業しようとするか（まだこの形態に慣れてないしの）」

―西の洞窟・最奥―

洞窟の主

「グルルッ♪」

虚無子

「おお！お主が我を守ってくれていたのか」

もふもふ

拳士1

「良かったあ！！洞窟の主さんすっかり元気になって」

もふもふ

勇者1

「う、うむ…」

虚無子

「よし！私の封印が解かれたらお主を正式な配下に加えてやろうでないか！」

洞窟の主

「グルルッ♪グルルッ♪」

虚無子

「ふむふむ、そんなにうれしそうにしおって可愛いもう」

拳士1

「洞窟の主を可愛がってる虚無子ちゃんが可愛い…」

勇者1

「拳士1…よし！これで心置きなく城塞都市に行けるな」

続く

レベル110(10話)で登場したキャラのレベル

魔王1竜魔形態↓1200万

部下1 ↓8900

冥王1↓10000

竜皇1第二形態↓真竜皇1↓8700兆

勇者1↓15

拳士1↓15

虚無子↓5

洞窟の主↓18

レベル?? ー外伝 宇宙帝国皇帝（前書き）

レベル6（6話）で登場した宇宙帝国皇帝の話です

レベル??? 外伝 宇宙帝国皇帝

1とある宇宙・宇宙帝国主銀河帝都・銀焰の宮殿1

宇宙帝国軍外征艦隊大将1・3次元ホログラム映像

「No4456超銀河団複合体の制圧完了致しました!」

宇宙帝国皇帝

「よくやった!あとはゆっくり休むがよい大将1よ」

宇宙帝国軍外征艦隊大将1・3次元ホログラム映像

「ははっ、それでは失礼致します」

宇宙帝国軍大元帥

「順調ですな」

宇宙帝国皇帝

「うむ：既に2000億個の超銀河団を支配下に治め、この宇宙の最大勢力である神聖宇宙皇国の第2皇女を妻に迎え、末恐ろしい程の順調さだ」

宇宙帝国軍大元帥

「前居た宇宙が突然消滅した時はどうなるかと思いましたが、よくぞここまで：流石陛下です」

宇宙帝国皇帝

「そう褒めるはない!!そうそう、例の件でa方面多元宇宙商会連合とは連絡は取れたのか?」

宇宙帝国軍大元帥

「ははっ、物理法則無効コーティングされたレベル10万以上の戦闘種族を5250兆3000億体と銀河制圧級宇宙戦艦2兆2200億隻を注文致しました」

宇宙帝国皇帝

「それはご苦勞!この宇宙には無い強力な兵器や生命体をa方面多元宇宙商会連合商圏下の別宇宙から買い取り利用する、何とも効率の良いことだ」

宇宙帝国軍大元帥

「はい、それらに対して支払うこちらの対価はこの宇宙のありとあらゆる情報の提供と潜在能力を秘めた生命体や種族を輸出することですが…この宇宙は物質や生命に溢れていて何かと便利ですな」

宇宙帝国皇帝

「だが一番の問題は、我が妃の母国である神聖宇宙皇国だ、最近怪しい動きをしてるようだが？」

宇宙帝国軍大元帥

「はっ、我が帝国諜報騎士団の報告によると我が宇宙帝国と神聖宇宙皇国の国境沿いにあるN011超銀河団複合体に20億個宇宙艦隊を集結させている模様です」

宇宙帝国皇帝

「そうか…そろそろ神聖宇宙皇国と戦わなければならないようだ（済まぬ妻よ）」

宇宙帝国軍大元帥

「はい、我が帝国の急速な勢力増大に危機感を感じ、我々にどちらがこの宇宙の覇者かどうか分からせる為にここで一戦交えるつもりでしょう（勢力比で言えば神聖宇宙皇国6・我が宇宙帝国4か…）」

宇宙帝国皇帝

「うむ…よしっ気分転換に我が妻との間にできた娘達に会ってこよう、後は任せたぞ」

宇宙帝国軍大元帥

「ははっ（流星の陛下も少し悩んでおられるようだな）」

ーとある宇宙・宇宙帝国主銀河帝都・皇族専用闘技場ー

はああああ喰らえブラックホールナックル！

宇宙帝国皇帝・第1皇女の攻撃↓宇宙帝国皇帝・第2皇女へ230万のダメージを与えた

宇宙帝国皇帝・第2皇女

「痛い！お姉様ったら酷い…本気で攻撃するなんて」

宇宙帝国皇帝・第1皇女

「そんなこと言ってたら練習にならないでしょ？もうホント情けないんだから」

シュン

宇宙帝国皇帝・第1皇女

「お父様！聞いて下さい！妹ったらホント情けなくて…」

宇宙帝国皇帝・第2皇女

「お父様！聞いて下さい！お姉さまったら本気で…」

宇宙帝国皇帝

「2人とも落ち着きなさい！（育て方間違ったか…）それよりもだ最近家族皆で食事してなかったので今晚どうだ？」

宇宙帝国皇帝・第1皇女

「はい！喜んで！お母様も一緒ですよね？」

宇宙帝国皇帝

「うむ、もちろんだこれから誘いに行ってくる」

宇宙帝国皇帝・第2皇女

「やったああ☆」

宇宙帝国皇帝

「じゃあお前たちは正装して銀焰の宮殿で大人しくしときなさい」

宇宙帝国皇帝・第1皇女

「はい！」

宇宙帝国皇帝・第2皇女

「はいっ☆」

宇宙帝国皇帝

「よし、良い子達だ（それにしても妻の面影が出てきたな…）」

―とある宇宙・宇宙帝国主銀河帝都・銀焰の宮殿・空中庭園―

宇宙帝国皇帝

「ここに居たか」

宇宙帝国皇帝妻

「あら、あなたどうしたの？」

宇宙帝国皇帝

「うむ…久々に家族皆で食事でもどうか思ってたな…」

宇宙帝国皇帝妻

「それは楽しみですわね！…で、何かあったのですか？私にできることなら何なりと申しつけて下さいね」

宇宙帝国皇帝

「やはりお前には敵わんな！済まない神聖宇宙皇国と戦争になるかもしれない」

宇宙帝国皇帝妻

「そうですか…私はあなたの妻、いや妃になると決めた日からいつかこういうことになるだろうとは予想してました」

宇宙帝国皇帝

「うむ…」

宇宙帝国皇帝妻

「だからこそ！私はあなた、いや陛下にどんなことがあるとうも着いていきます！さあいつもの覇気に溢れる皇帝はどこに居るのです？」

宇宙帝国皇帝

「ありがとう…よしっ我は全てを支配する皇帝で絶対的な存在だ！我が覇道の邪魔になるものは全て蹂躪してくれるわ！はっはっは！」

宇宙帝国皇帝妻

「それでこそ陛下です（そして我が認めた最愛の夫です）」

これは、あらゆる多元宇宙を支配下に治め神にも戦いを挑んだ、後に「銀焰の神帝」と呼ばれる者の物語である

続く

レベル1??（外伝1）で登場したキャラのレベル

宇宙帝国皇帝 ↓87万

宇宙帝国軍大元帥 ↓50万

宇宙帝国軍外征艦隊大将1 ↓19万

宇宙帝国皇帝妻 ↓60万

宇宙帝国皇帝・第1皇女 ↓45万

宇宙帝国皇帝・第2皇女 ↓30万

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3505x/>

最強の魔王を目指す！レベル的に？精神的に？レベル的にです！

2011年12月13日01時02分発行